

グランドゼロ

GROUND
ZERO JCF

91 春

2012年3月26日 発行

- 第96次訪問団
事故後26年の地へ 震災後初めての訪問団
- チェルノブイリ
放射能と妊娠（抜粋日本語訳）



JCF

君のところに行こうとしたら

フラート・オクジャワ（1924～1979）

訳・神谷さだ子

君のところに行こうとしたら
びっくりするほど近かったんだ
やさしさが攻撃する
トランペットの静かな音の中

知っているかい、オーリヤ
古い家々が冷たくなっていくこの通りでは
詩人達が詩を競うコンテストがあり
女学生達は狂おしいほどの恋に走る

小隊、大隊のように
一気にやさしさは心に注がれる
そしてやさしさの青い旗が
あなたの肩にかかっている

この至る所で 人生は絶え間なく続き
手付かずの未来
木の葉は、くるくる回り
かかとでアスファルトをたたく

あなたの慈愛に満ちた手を取り
私の前には 何かがかすかに見える
胸がいつばいになるほどに
胸はふくらむ

グランドゼロ 91 春

GROUND ZERO JCF

目次

第96次訪問団
事故から26年の地へ
震災後初めての訪問団

震災後初めての ベラルーシ訪問を終えて	<鎌田 實>	6
事故から26年 人々は放射能と向き合って暮らしてきた	<神谷さだ子>	11
訪問団に参加して	<佐藤健太>	20
どんな未来にしたいですか？	<横内香苗>	28
「チェルノブイリ・放射能と妊娠」(抜粋日本語訳)		32
食品放射能測定の手順方法		39
Team めとばに期待する	<三輪 浩>	40
僕らの取り組み	<浜崎竜太郎>	42

J I M-N E T 会議 感染症対策研修等支援続行を	<佐藤真紀>	48
---------------------------------	--------	----

連載 & お知らせ

連載随筆「An Essay」	<宮尾 彰>	50
ベラルーシの食卓		52
モスクワ便り		53
振替用紙のメッセージから		54
ありがとうございました！		56
「福島原発被災者支援募金」のお願い		59
Здравствуйте！(事務局広場)		60
カルチャーレビュー		62
インフォメーション		66

第 96 次訪問団

事故から 26 年の地へ 震災後初めての訪問団



ウラジーミル・チェルネンコ副大臣（左端）に故郷飯館の写真を見せる佐藤健太さん（中央）

3・11 は世界中を震撼させた。

ベラルーシの方々からも、私達が日本の皆さんのためにできることがあれば、何でも言ってください、と励まされた。

彼らが積み重ねた経験から学ぶことが多々ある。

震災後初めての

ベラルーシ訪問を終えて

鎌田 實（JCF理事長）

3・11の震災から1年がたちました。被災者にとって辛い、辛い1年だったと思います。

JCFは30キロゾーンの中に入る初めての救援医療班として、諏訪中央病院とタイアップしながら南相馬に入りました。数カ月の南相馬への諏訪中央病院医師看護師の派遣が終わった後、諏訪中央病院は若手医師による石巻市雄勝診療所の支援に取り組みました。

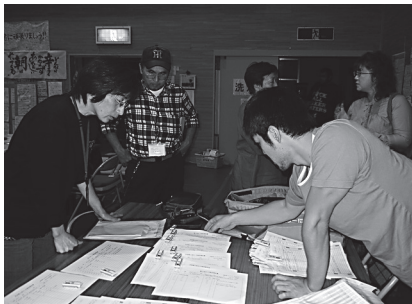
JCFはその後、福島の子どもの支援を理事会で決定しました。すぐにガラスバッジ（積算線量計）50台を1年間契約し、南相馬の妊婦さんや子ども達の希望者につけてもらいました。大変大きい成果がありました。

このフィルムバッジで数字を見ながら5組の家族が県外に避難しました。やむをえず福島に残っている家族も放射能の「見える化」ができました。産婦人科の高橋亨平先生が代表をしている除染研究会のグループが除染を行った効果も、このフィルムバッジで確認することができ、大きな役割を果たしてきました。

あるお宅では、生まれたての赤ちゃんのベッドの位置が家の中で一番放射線量が高いことが、このガラスバッジがきっかけで判明しました。20キロ圏内に置いてあった車を、取り出して乗った妊婦さんが、急に外部被曝量が多くなったことに気がついたのもこのガラスバッジのおかげでした。

二本松で昨年9月に新築された三階建てのマンションの一階のコンクリートが汚染されていたことが1月にわかりました。これはマンションに住む中学生が二本松市が貸し出したガラスバッジを身につけていて、3カ月で1.5ミリシーベルトと高い値を示したことから、二本松市が周辺の調査を行った結果です。

僕は震災後すぐに、福島県全体がガラスバッジを貸し出すべきだと提案しましたが、国や県には聞き入れてもらえませんでした。たとえば1年前の3月15日の12時から1時にどこにいて何をしていて何を食べたかを書く事ができる人はそうはいないでしょう。県内全



現地で打合せをするガラスバッジプロジェクトスタッフ

体に配られている問診票はまた20%の人しか書いていません。予想した通りです。問診票がなくても、ガラスバツジを各地域の人々にまんべんなく千台ほど持ってもらえていれば、どの地域の人たちがどのくらいの外部被曝をしているかが、おおむねわかったでしょう。

JCFは20年間に96回、専門家によるチエルノブイリ訪問団を派遣した経験から、放射能の「見える化」が最も大事と、当初から強く訴えて実践、行動を進めてきました。

食品放射能も測定できるようにしました。食品でも水でも井戸水でも母乳でも不安なものがありましたら、事務局に電話連絡をとり測定を申し込んで下さい。JCFの会員さんは一検体千円（一般2千円・法人5千円）でお受けしています。信州大学理学部院生が測定を担当しています。検出結果の数値をどう考えたらいいか、どう読めばいいかも懇切丁寧に教えてくれます。このわかり易い説明がJCFの売りです（本誌39〜49ページ参照）。

福島に住む方に生活空間の放射線の見える化を進めるために、空間線量計貸し出しを、現在は二本松市の幼稚園を中心に続けています。

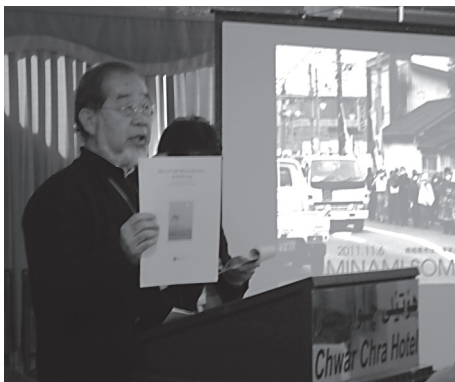
昨年7、8月と茅野市に約千組程の親子が夏の保養にやってきました。その中で希望する方のお子さんの診察を

しました。その後も福島から一時避難してきたり、引越して来たお子さんのうち希望する方に検診支援をしてきましたが、検診の希望者があとをたちません。信州大学小児科医師が、忙しい外来の予定を縫って検診をしてきています。健康診断には健康保険が使えないのでJCFが費用支援をして、被災者の方に大変喜ばれています。これらの活動ができるのもJCFの支援者のみなさま方の応援のおかげと感謝しております。

2月21、22日とイラクのアルビルで第11回JIMNET会議が開催され、JIMNET構成NPOとしてJCFも参加しました。

JIMNETはアルビルに事務所と日本人スタッフ1名を置いています。

そのアルビルにあるナナカリ病院の急



JIMNET会議で話す鎌田理事長

性リンパ性白血病の寛解率が85%から91%に改善されました。JIM-NEはナナカリ病院に感染症対策指導をしてきましたが、イラク人特有のおおらかな性格が災いして、なかなか手洗いなどが励行できず成果が上がらなかったのですが、今回の発表では顕著な改善が見られました。

イラクのモスル地域で悪性リンパ腫が16例から32例に増加しています。この地域も劣化ウラン弾がたくさん落とされた地域です。劣化ウラン弾を一番落とされたバスラで、急性骨髄性白血病の比率が非常に高い事がわかりました。

モスルの病院の医師であったリカ医師は信大の大学院で遺伝子研究を行っています。約500例の白血病の子どもの遺伝子解析を行い、今回医学雑誌に研究論文が掲載されました。2力以上に遺伝子の異常があると急性骨髄性白血病を発症します。2力以上の遺伝子の異常がなぜ起きるかを研究しているのですが、残念ですがまだ劣化ウラン弾との関連を断定できるまでにはなっていません。劣化ウラン弾と小児白血病の因果関係が証明できれば、武器としての劣化ウラン弾の使用中止を国連で決めことができると思っています。

これからもイラクの白血病の子どもたちを救いながら、科学的な根拠を究明していきたいと思えます。

チエルノブイリの子どもへの支援を始めてから21年になります。

1カ月程前に新しい在日ベラルーシ大使とお会いしてきました。大使はベラルーシアカデミーの元副総裁も務めた方です。

2月の第96次訪問では大使のご手配で、今までは行けなかったような所を訪問して情報を得、放射線被害を食い止めるために、26年間ベラルーシは何をしてきたかを見ることができました。

ベラルーシを代表する甲状腺外科のオーソリティー、ユーリー・ジェミチク教授は20年間来の親友です。大歓迎を受けました。

チエルノブイリ省の大臣にもお会いしてきました。放射線の汚染地区ベト力で26年間徹底して子どもを守るために放射能からの疎開をする保養のシステムや、どのように食品を安全に市場に出すかなどのシステムを聞いてきまし



ゴメリ自由市場の食品測定室



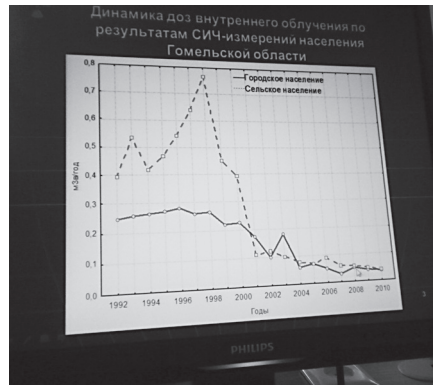
左から高村さん、佐藤さん、鎌田理事長、イリナーさん（ベトカ市役所）

た。

今回は福島県の飯館村の佐藤健太君と南相馬の5歳の子どものお母さんでもある高村美春さんが同行しました。福島県が今後どうしたらいいかを若者やお母さんの目で見てもらいたかったからです。

僕らが21年支援しながら作ってきた人脈が、こんなかたちで役に立つとは思っていませんでした。とても残念ですが、後ろを向いていることはできません。ベラルーシでは何をどうしたかを少しでも学びながら、被害をくいとめなければなりません。

事故後15年、汚染地域に住む人と都市に住む人の体内被曝量には大きな差がありました。2002年くらいからその差がほとんどなくなっています。徹底した食品の放射線測定をし、市場に出る物は全部チェックができるような



汚染地と都市部に住む人の内部被曝量の変遷

システムにしたと、ゴメリ州の執行委員会副知事にもお会いしてお話を聞きました。

どこでお話を聞いても重要なのは、いたるところで放射能の測定をし、放射能の「見える化」をすること、医療システムを充実させること、教育、という3点をあげていきました。お年寄りも生活習慣をなかなか変えられないけれど、きちんと教育を通して子どもにも知識を持たせ、子どもが実際に食品の放射能の測定をするような実習を通して、子ども自身に意識を植え付け、子どもを通してお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃん、おじいちゃんもしたと聞きました。

JCFが行ってきた20年間96回の支援が、日本のベラルーシ大使館を通じて現地に克明に報告されていたので、

すべての場所で大歓迎をうけました。これもJCFを支えてくれるみなさんのおかげです。福島から同行した二人にとつても参考になったと思います。

ベラルーシの旅をしている間、グラランドゼロの巻頭詩・神谷事務局長が訳している、オクジャワの詩を何度も何度も読み返しました。

「私は見ている あざ笑うかのように／トランプのように日々が混ぜ合わさる／未来の 最初の／生きたもの消えたもの／一方もしかししたらそれは私達を／悲しげに眺めているのかもしれない」

プラート・オクジャワは1976年には亡くなっています。チエルノブイリの悲劇を見ていません。「未来の 最初の／生きたもの 消えたもの」とは、勝手な想像では、もしかしたらチエルノブイリの悲劇を受けたベラルーシの放射能の汚染の村の人々……。「一方もしかししたらそれは私達を／悲しげに眺めているのかもしれない」この見られている私たちとは3・11後の日本……。

チエルノブイリの悲劇をずっと見てきたにもかかわら

ず、私たちは大きな間違いをしてしまいました。グラランドゼロに連載をして下さっている宮尾彰さんの「深みへの旅」もベラルーシの旅の間、毎日のように読み返しました。

「今この国に住む私たち一人ひとりに求められている深みへの旅について。／空の器と化した己を見つめること。／内側に見えない何かを湛えること。／決して、偽物で器を充たさぬこと。」

とても深い言葉です。自分をからっぽにしながら、そこに必ず偽物でない何かを、今度こそ本物の何かを満たしていかなければいけない時に、自分もニッポンも立たされているような気がしてなりません。

皆さんの応援を得て、これからも本当にいい国日本にするために、どうしたらいいか真剣に考えていきたいと思う旅でした。日頃のご支援に深く深く感謝します。

事故から26年

人々は放射能と向き合って暮らしてきた

神谷さだ子（JCF事務局長）

J I M | N E T 会議を終え、24日、
ミンスクで福島チームと合流した。科
学アカデミー、非常事態省、情報セン
ター、カマロフスキー市場と盛りだく
さんのスケジュールに乗っていく。ゴ

メリでは、州執行委員会のアレنجも
あって、これまで訪問したことがな
かった放射線学研究所やチエルノブイ
リ子ども救援の事務所でも、お話を聞
くことができた。

山のないベラルーシは、雪に覆われ
た雪原のはるかかなたに、低く垂れこ
めた雪雲が続き、どこから空なのか見

分けがつかない。この境のない茫洋と
した大地と空との融合感が、先行きの
見えない私たち人間の有り様を自分の
内なる世界に誘ってくれるようで、私
にはとても好きな光景だ。

96次訪問団の目的は、住民の健康管
理、土壌の汚染除去、食品の測定など、
チエルノブイリ原発事故によって一番
汚染されたベラルーシが、26年かけて、
どのようなシステムを作ってきたか、
住民にどれだけ周知され、実行されて
いるかを学ぶことだった。

福島から、南相馬市の5才の子ども
のお母さん高村美春さんと、飯館か
ら福島に避難している「負けねど飯
館!!」の佐藤健太さんも同行した。二
人は、この訪問で25年後の自分達が見
えるかもしれない、福島県民が置かれ
ている現状から25年の月日、その過程
の気持ちも聞いてみたいと出発した。



ベラルーシの冬景色

◆チェルノブイリ事故の影響は、甲状腺がんと、ストレスによるさまざまな症状

24日、ミンスクにある科学アカデミー卒業教育部にユーリー・ジェミチク教授とオリガ・ロドツエビツチ教授を訪ねた。

チェルノブイリ事故では、放射性ヨウ素によつて起こつた疾病として、認められているのは、小児甲状腺がんのみである。

ベラルーシの甲状腺がんの第一人者であるユーリーは、1995年にJCFの招きで来日し、信州大学で3カ月にわたつて研修を受けた。

以下はユーリーの言葉である。

しこりがあつても、がんになるとは限らない。がん発症は、子どもだつたら4年、大人は、10年後になる。放射

性ヨウ素の半減期は8日と、とても短いので、事故時の妊婦さんが心配だ。また、精神的なストレスで何の病気が起こつたかと言つことは、とても難しい。放射線も一つの理由ではあるが、他の要素がある。

超音波でしこりを見つけ、穿刺によつて、悪性が良性が見ることができると、良性の場合は、治療は必要ない。また、1986年旧ソ連だつた当時、4月から9月にかけて、原発近辺の母子を、急遽ロシア南部に避難させた。

◆治療すれば治るストレスからの症状

小児科のオリガ先生は、小児科医である。一般的な子どもたちの症状について次のように語つた。

ストレスからの免疫能の低下で子どもたちが病気にかかりやすくなつた。発熱や下痢は、ストレスによるもので、

治療すれば治る。被曝ではない。子どもたちへの影響は、甲状腺がん以外にはなく、セシウムによる影響もなかった。事故直後、汚染されたミルクを飲んだことが甲状腺がんの原因だつた。白血病についても、ストロンチウムの影響は分らない。

しかし、放射性物質が大気中に拡散した中で暮らすのだから、毎年の検診が必要だ。がんが分かつたら、すぐ治療しなければならぬ。

甲状腺がんについては、初期6カ月にリスクが高いが、その後は、ストレスが問題になる。花や土に触ることで、病気になる事はないが、いけないと解りながら触るとストレスになる。ストレスを和らげる精神的な治療をするよりも、家族との普通の生活をする方がいい。家族との関係が落ち着けば、友人関係も普通になる。

1才以下の乳幼児はリスクが高く、次は5才以下。小さな子どもほど、見

守っていかねければならない。

体内被曝を下げるためというより、ストレスを下げるために保養は効果がある。7才以上になれば、母と一緒になくてもだいじょうぶではないか。

奇形児の数は増えたわけではない。いろいろなうわさがあったが、小児の死亡率が上がったこともない。最近は生活の質が上がっているので、平均寿命が伸びている。ストロンチウムやプルトニウム被曝は、生活の仕方を変えて少なくすることはできるが、無くすることはできない。

今は、落ち着いて！

年に一回の検診をしてほしい

これは中央の科学アカデミーに所属する学者視点からの発言かもしれないと、引き続きゴメリの放射線医学人間環境センター、ゴメリ地区病院でも、臨床現場で住民の健康を見てきた医師達の声を聞いたが、同じ答えが返って

来た。

27日午後、ゴメリに到着して、すぐベトカの地区病院に車を走らせた。病院長のナージャ先生は、子どもを育てている2人のお母さんと呼んでいてくれた。ぜひお母さん達の声を聞いてみたいという高村美春さんからのリクエストに応えてくれた。



右からナターシャさんラリーサさん



2人のお母さんの話に関き入る佐藤さん、高村さん

39才のナターシャさんは、3人の子どもの母。心理士として働いている。今気を付けていることは、森に行かない、測定済みの食品を商店で買う、年に1回検診を受けることだと言う。

ナターシャさんの留意点は、外部被曝を避けるためにホットスポットには近づかない。食品からの内部被曝を防ぐには、食品の測定が欠かせない。き

め細やかな健康診断の継続は、汚染地に住み、放射能と向き合つて暮らしていかなければならない上での大切な要素だ。

「事故が起きたのは、12歳の時のことでした。よく覚えています。事故後は庭に何も植えませんでした。マスクは無かった。関係ないと思つていました。ミンスクから医師がやつてきて、学校で内部被曝測定をしました。高い場合は、病院で再検査を受けました。今でも、2週間ごとに環境モニタリングを行っています。以前ここは、10〜15キュリー（*1キュリーは370億ベクレル）の汚染がありました。」

私は、社会問題センターで働いていますが、この地で、先天性異常や異常出産の話は聞いたことがありません。子どもたちは、ストレスから鼻血を出したり、下痢をしたりすることがあつたようです。

ベト力にずっと住んでいます。事故直後の第一段階では、情報が無く、危ないかどうかも分かりませんでした。この地が汚染されていることが分か

り、チェルノブイリに原発がある事が分かつてからも、パニックにはなりませんでした。中にはストレスからミンスクに移住した人もいます。

商店や市場の食品は測定されたものが売られています。サインとスタンプのついた書類が発行されます。自家製野菜も保健局で無料で測定します」

ラリーサさんは、2人の子どもの31才のお母さん。事故は5、6才の頃、だった。

「何も心配しませんでした。20〜40キュリーの汚染地では、年に2回の保養が保障されました。短くて24日間、クラス全員で出かけます。健康管理もいきとどき、勉強も厳しく教えてもらえました。かつては、ソチやバルト海

沿岸にも行きました。イタリアやドイツにホームステイで呼んでもらつた子どもたちもいます。汚染の度合いに区切りはありません。

環境センターから、外科・小児科・甲状腺専門医・耳鼻科・眼科の医師が来て、定期検診します。不安はありません。友人たちの出産に問題がなかったため、心配しませんでした。親やお医者さんにも、特に何も言われませんでした」

二人のお母さん達の証言は、州執行委員会で聞いた、測定と医療の充実で住民を守る方針を裏付けていた。

◆汚染に関する情報の伝え方

◎非常事態省チェルノブイリ委員会
ウラジーミル・チェルネンコ局長と会い

チェルノブイリ省のように、事故に

よる被害対策をコーデイネーションする庁が必要だ。汚染地域住民に対して健康を守り、手当金を保証する。内部被曝・年間1ミリシーベルト以下を目指し、以下の対策を立てる。

①除染

②住民避難：強制移住・自由移住

③手当の支給

④健康診断

事故直後、学校に通う子どもたちには、汚染されていない食品で無償の給食を出した。

特に学校教育は大切だ。放射能汚染という未曾有の条件のもとでどう過ごしていくか、測定器の使い方から、食品の測定について、子どもからの情報は親も聞く。

今でも国家予算の中から、毎日百万ドルがチェルノブイリ関連で使われている。そのうち60%が、手当金や健康診断の費用、農業用地にフッ素やカリ

ウムなどの肥料を入れるために使われる。

除染は幼稚園・学校・病院を優先して5〜50cm土を交換する。全国に86カ所ある処分場を集める。事故直後国土の24%が1キユリー以上汚染されていたが、25年後には、14%になった。

非常事態省では、佐藤さんが、飯館の写真を大臣に見てもらった。

美しい飯館の四季に、佐藤さんの自宅の庭に線量計を置いた写真があった。昨年4月、約300マイクロシーベルト/時、最近では130マイクロシーベルト/時、冬は森でイノシシなどのハンティングをするお父さんは、一人飯館に住み続けているという。鎌田先生が、即「この数値で、大臣はどのような指示を出しますか」と聞いた。しばらく、逡巡しているような沈黙があった。そして、口から出た言葉は「強制移住の数値ではありません。食

べ物に十分気を付けて、内部被曝を防ぎましょう」と言われた。

この後も、佐藤さんの飯館の写真ファイルは、ベラルーシの人たちにとっても印象深かったようだ。じっと見入っていた。

◆子どもたちに伝える

◎ロシア・ベラルーシ情報センター

2007年10月設立

放射能・放射線医学・コミュニケーション・経済の専門家を擁し、広い分野から情報収集している。

コミュニケーション分野では、住民はさまざまなカテゴリーがあるので、それぞれに情報の伝え方を考慮する。

①放射能汚染についてデータベース作り
汚染地図

汚染についての科学的な分析

映像制作し、地域の図書館に配布

②全国19（内13はゴメリ州）の学校にガ

ンマ線測定器を置いて、放射能安全教育を行う。野菜・キノコのセシウム測定を行っている。

- ・住民情報センター 50カ所
- ・農業や森林の汚染情報を収集
- ・幼稚園の子どもたちから絵や詩を描いてもらう

毎年、汚染地図・食品汚染レベル・市民の被曝量についての情報を収集し、公表している。91年から、年間1ミリシーベルトを許容量とする。5年計画で草や作物にセシウムが入らないよう農業対策が立てられている。

カルシウム系、カリウム系の肥料を使う。

ミルクは37ベクレル／ℓ市場で測

定し、結果を見てから、再測定もできる。検出限界1ベクレル／ℓ

Q汚染地ゴメリの農産物がミンスクでは売れない、ということがあるか。
A心理的な影響だ。測定結果を発信する。

・食品測定所
保健局や森林組合に1000カ所以上。
自家製農産物の測定を無料で行う。

コルホーズでは、測定料金は1ドル以下。
学校の給食は汚染されていない食品を使う。

・健康診断
移住者は無料。
除染者・移住者・汚染地住民（汚染の度合いによって検診回数は異なる）
子どもは保養前に必ず受ける。

・サナトリウム（保養施設）
サナトリウム滞在24日間が保障されている。

・食品基準値
5回見直しが行われた。
1999年に制定された1ミリシーベルト／年が現在も使われている。
経済的な要因と、放射線核種により土壌にどの位移行するのか分らないため。

チエルノブイリを風化させないため、子どもたちの絵や詩を集めて展示したり、出版している。更に学校で食品測定を子どもたちにさせることで、放射能と長年に渡って向かい合っているかなければならない生活のトレーニン
グができるように思った。

集団移住や検診に関しては、かつての社会主義のトップダウン方式がプラ



ロシア・ベラルーシ情報センターの子どもの絵

スに働いているとも思えるが、長期に渡る放射能対策を子どもの時から身につけてもらうことは、ぜひ必要な事だと思う。

◆住民から自主自立の芽生え

ミンスクに到着した24日は、道路に水たまりがあり、春の到来を感じた。翌日、ゴメリに移動するときから雪が

舞い、27日は、足元がシンシンと冷える日だった。NGO「チエルノブイリ子ども救援」では、ホイニキ地区で、市民が自主的に雇用を立ち上げた話を聞いた。

2011年、ベラルーシでは、汚染地帯に2372の村があるが、61%がゴメリ州内である。

外国からの支援によって、汚染地帯での労働の確保が住民の手で進んでいる。

- ・ゴメリの子どもの家では温室を作り、野菜を栽培している。
- ・汚染されていない食品生産。
- ・木材加工。
- ・ベトカではアスファルト工場を作り、道路工事を行う。
- ・ホイニキでは、チーズ工場。
- ・ホイニキのおばあちゃんが、支援金で牛2頭を買い、15頭まで増やした。

その他、バスの運行、家屋の修繕、床屋など汚染地帯で自らの手で労働を確保している。

移住した人は移住先で、残った人にとつても、暮らしていくための仕事が必要である。かつてのベラルーシでは全く考えられなかった事象である。1991年末の連邦崩壊から、遅々としてではあるが、住民による自治意識が芽生えてきている。

◆市場の食品検査室

JCFの初期、チエチェルスクを拠点に子どもたちの検診活動をしたところ、地区病院の隣の保健局の測定室では、ターニャさん達が、地区の定点環境モニタリングと市場に並ぶ食品、村で自家栽培されている野菜、釣って来たばかりの川魚の放射能測定を行っていた。ざら紙に手書きで数値が記録

され、ターニヤさんらは、村人に結果を知らせて注意を喚起していた。その様子を、当時は漫然と見ていた私だ。今回、食品からの内部被曝を防ぐことが大きな課題になると思われることから、自治体としての取り組みについても聞き取りをした。

◎ミンスク、カマロフスキー市場

ミンスクの中心街に大きなドームのカマロフスキー市場がある。中には、圧倒される程の野菜・果物・肉・肉加工品・魚などが並んでいる。ここにも測定室があり、放射能検査がきちんと行われていた。しかし、残念なことに訪問したのが土曜日。許可が取れず、中を見学することはできなかった。

肉を売っている女性に聞いてみた。「私たちは、必ず検査を受け、証明書をもたらって販売しています。ほら、この肉塊にも検査済のスタンプがありませうよ」

米国式のショッピングモールも建設され、スーパーマーケットもできているベラルーシで、昔ながらのこうした市場も、豊富な食品があふれ、賑わっていた。

ゴメリの自由市場では、ベトカ地区病院のナージャ先生の手配もあって、スムーズに検査を見せていた。だいた、8台の食品測定器が置かれ、専門測定士が次から次へと野菜を刻み、測定器にかけていた。

年間1ミリシーベルトを限度として、キログラム・リットル当たりの上限が、食品ごと細かに取りきめられている。

日本でも、4月1日から従来の5分の1に許容限度が引き下げられるが、食品ごとの摂取量は違うので、よく食べる主食のお米を他の食品と一緒にしない、子どもたちが食べるものについては、野菜一般と混同しないでほしい

等、今後要望していきたい点に気がついていた。

人口2万人弱のベトカにも測定器を2台置いて、埋葬の村に住み続ける老人達が自家栽培する野菜も必ず測定していた。小さな保健局でも、キノコ・ベリーを中心に1日50サンプル程をこなすという。

ちなみにこの保健局の前の線量は0.4〜0.21マイクロシーベルト/時だった。

◆除染の難しさと研究

◎放射線学研究所

各専門分野の方々が集まってくれたが、時間がなく、所長のプレゼンを聞いたのみだった。今後日本の土壌改良の専門家との連携をコーディネートすることも必要かもしれない。

汚染地帯で生活するために、実際の

な経験知が必要である。

性質と汚染度が違う土壌改良をいかに行うか。

どこに何を作付するか。

土壌中の放射性核種の移行・核種ごとの半減期・植物ごとに移行の違いがある。

◆内部被曝を下げる方法

1998年をピークに2010年には0.05ミリシーベルト平均になった。

森に入らないように、キノコを食べないように警告している。

・情報を普通の人にいかに伝えるかが難しい。

・魚・建材の基準を決めた方がいい。

◎ゴメリ州執行委員会

副知事 ピョートル・ネスレンコ

他、保健局長・副保健局長・知事参与・

チエルノブイリ問題担当

喜びより、不幸は人々をより近しくする。事故後さまざまな風評があった。10〜20年後死ぬと言われたが、生きていますよ。

うわさはうわさ。社会的な対策が役に立って実際に生活できる。

食品の測定と医療の充実で次第に人々は落ち着きました。ストレスが多くの病気の原因になったのではないだろうか。

ゴメリ州住民13万人の内部被曝測定で、年間1ミリシーベルトを超えた人は241人。森のものをよく食べる人だった。

佐藤さんが示した飯館村の写真に、

ゴメリの州政府の方、子ども救援のスタッフたちも引き付けられていた。「なんて美しいところ！」と感嘆の声を上げた。1年前、初めて支援物資を積んで南相馬に向かった時、未明、簡易線

量計の針がアラームの音とともに振り切れた地。春桜の咲くころ、事故から1カ月たつてから計画避難地域に指定された時、ここが埋葬の村になってしまうのか、と感じた飯館村。同じようにベラルーシの人々が福島に現在に寄せた共感、初めて、JCFという媒体によってチエルノブイリと福島がつながったと感じる時だった。

今後、取り組むべき課題を抱え、更に地域住民に添う活動を続けていかなければならない。チエルノブイリと手を携えながら……。

訪問団に参加して

佐藤健太

ふくしま会議 事務局長
負げねど飯館!! 常任理事

疑問や不安の日々の中で

震災後、未だ先の見えぬ暗闇の中、前に進んでいるのか同じ所をぐるぐるしているだけなのかすら、わからないまま1年が過ぎてしまいました。

今回「チエルノブイリ・ペラルーシ」に行きたいと思っただけは、日本との違いを実際に見たかったからです。原発の事故後、早くからチエルノブイリと比較をされてきましたが、様々な方々が「チエルノブイリと日本は違う」とおっしゃいます。

しかし、私は何がどう違うのか？
理屈ではわかっていますが、すんなり飲み

込めませんでした。

そこで、もしチエルノブイリやペラルーシに行ける機会があるなら、その土地に立ち、自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じたいと思っていました。

人は立場や立ち位置の違いにより、見方・見え方・感じ方・伝え方、さまざま違います。

今までは、専門家の方々が専門家の立場で見て来た事について聞いていましたが、私は、今回当事者の一人の村民として同じ避難区域の26年後の姿を実際に見て、そして今私たちは何をすべきなのかを見つけないといけない。

私たちの飯館村は計画的避難区域になっていて、出入りは制限されてはいないものの、果たして私たちは故郷に帰り生活ができるようになるのか、はたまた別な土地に移って生活再建すべきなのか、岐路に立たされています。

除染は何をどうするのが効果的なのか。

か。

もし戻った時に、今までの様な農業基盤の村になるのか、それとも別な形にして行くのが望ましいのか。

健康面の心配はどうか。子どもたちの未来はどうか。
未だに様々な疑問や不安のなかで生活を続けています。

その中で、昨年2011年11月11日から13日の3日間、福島大学を中心に「ふくしま会議」を開催しました。

世界から見ると福島県は「フクシマ」の一括りとしか見えていませんが、福島県と言っても広く、会津・中通り・浜通りの縦の山脈を境に大まかに3地区に分かれています。

会津地区は、原発からも遠く、放射線量も低い地区で、すぐに風評被害の払拭と復興に動き出したい地区。

中通り地区は、市が沢山あり人口が密集していて、放射線量の高い場所が



疎らにあり、住民もどうしたら良いか迷っている状況の地区。

浜通り地区は、太平洋沿いの地区で今回の津波の被害に重ね、原発の被害により3・11に近い所で止まっている地域もあります（飯館村はこの浜通りに属し、中通りと浜通りの間の地区に位置します）。それぞれの地区にはそれぞれ苦悩があり、そこに避難して生活している方達もまた多くの苦悩があると

いう状況の中で、お互いの現状が把握し合えていないために、福島県民の中で分断が起きていると聞きました。

これはなんとかできないだろうかと話し合い、たくさんの協力者とともに、まず福島県内で何が起きているのか、メディアでも伝えられていない切実な

「声なき声、草の根の声」をすくいあげ、日本中、世界中に届けよう。そしてこれを聞いて国内外の方々が少しでも福島が理解できれば、誤解や分断が減るのではないかと思ひ開催しました。

2日目が初日をすこし碎いて、「いのち」子どもの今そして未来へ・放射能と向き合う・自然再生可能エネルギー・市民活動の現場から』の4つの分科会と、大きな枠で『若もの会議』を開催しました。大学院生が中心に若い世代が、福島の『ふ』にちなんだ「ふりかえる・ふれあう・ふみだす」の3つのテーマで、午前10時〜午後6時ま

での長時間、ワークショップ形式にて「3・11から、ふりかえり、心のふれあいをもつて、今後、緩やかにつながってふみだして行こう」と話し、その声はポストイットに書いて壁一面に張り出されました。

ナジェージダ先生とイリーナさんにもこの場に来てお話ししていただき、最後に細野環境大臣も視察に来られ、会場に張り出された若ものの声を見て、話されました。

そして3日目は、さらに碎いて福島県内に分かれ、それぞれの地区で「ふくしま会議」をする流れ。福島地区では「NHK復興カレッジ」in福島大学として、鎌田實先生とナジェージダ先生の対談が行われました。

当日は「飯館・南相馬・相馬バスツアー」が企画されており、午前中に鎌田先生、ナジェージダ先生、イリーナ

さんも一緒に飯館村を視察。

その後、私の自宅をご案内して汚染状況などを見ていただき、午後には福島大学に移動し対話講演となりました。

それがきっかけで鎌田先生とお話ができ、さらに、もしチェルノブイリ、ウクライナに行く機会があるのなら一緒にさせていただけたいとメールしたところ、ご快諾いただき今回このような貴重な経験ができました。

チェルノブイリ博物館

21日、日本を出発しイスタンブールへ。初日はイスタンブール泊。

22日、キエフに移動。イリーナさんと合流しチェルノブイリ博物館へ。

博物館では、入り口を入ってすぐのところから今回の震災の福島のコーナーかできていた。

奥に進むと、階段の上に強制移住に

なった村のプレートが並べられていて、被害の範囲の大きさを物語っている。

2階に進むと、チェルノブイリ事故が起きた午前1時23分付近で止まった時計と、当時のたぐさんの写真。

消防士の方、何も告げられないまま大事な物だけ持たされ強制移住になっ



チェルノブイリ博物館、除染作業をする消防士の写真

た村民、除染作業をした方々の顔、作業中にお亡くなりになられた方、除染によって取り壊され埋められていく民家など、当時の大変な状況が記録として並んでいた。

嚴重なマスクに防護服姿の写真、原子炉の上のがれきを鉛の服を着た方が2分交代でスコップで片付ける映像など、当時チェルノブイリで起きた事が、そのまま日本で再現されているかのように感じ、何とも言えない恐怖とため息まじりの怒りを感じた。

なぜ繰り返す……

23日、チェルノブイリ4号炉見学。キエフから車で移動、原発から30キロ圏のところまでバスポートと通行所をチェックされさらに車で進む。

途中、チェルノブイリの説明を受け、出発。

原発から16キロ地点、消防士の像が

ある場所で一旦停車。

おもむろに線量計を持って外へ行く
と道路向かいを馬雪車に乗った消防士
さんたちが通り過ぎる（0・07〜0・
26マイクロシーベルト／時）。さらに車
を進め10キロ地点のゲートをくぐりい
よいよ原発に近づく。

初めに建設途中のまま止まっている
5号炉が見えてくる。さらに進むと遠
くに4号炉。車の中では所々線量が少
しあがる。ホットスポットがあるのだ
ろうか。

4号炉手前200メートルの場所に
石のモニユメントがあり、周りには作
業員と思われる方達の姿が数名ある。
線量計は、6・33マイクロシーベル
ト／時。

石のモニユメントに線量計を置くと
2マイクロシーベルト／時、4号炉と
線量計の間の石の遮蔽の効果をあらた
めて実感した。

26年経ってもなお、原子炉から石棺

を通して放射線が出続けている現状。

当時の状況を想像しながらも、今後
の福島第一原発を思う……。

その後、チエルノブイリ市、プリピ
ヤチ市を見学。

見渡す限り無人の沢山のビルや施
設、子どもたちの笑い声の響く事の無
かった遊園地、当時は無かったという
たくさんの木々、人のいない街。風の
音しか聞こえない。まるで映画の世界
に入り込んだ様な気持ちで全く実感が
わかない。

福島のモニユメントがあるとのこと
で、帰りに立ち寄った。紅白の鶴の像
の横に、「Fukushima」と文字抜きにな
ったモニユメント。その反対側には
「Hiroshima」の文字のモニユメントが
あった。

もはや、日本のイメージは広島・長



鶴のモニユメントと福島の文字盤（右の石の上）

崎ではなく、広島・福島になっしま
ったのだろうか。

24日、キエフからミンスクに移動。
鎌田先生、神谷さんと合流しユーリー
教授、オリガ教授のもとへ向かう。

ユーリー教授、オリガ教授の話の中
で印象的だったのが、ヨウ素の影響に

ついて。放射性ヨウ素の半減期は短いので、事故時の妊婦さんが心配との事。鼻血や発熱や下痢は、ストレスが原因であるという事。私たちが日本で聞いていた事とあまりに同じで、若干拍子抜けした気持ちもあった。

しかし、初期の飯館の水のヨウ素の数値を見て頂き所見を伺うと、「大人は大丈夫だと思うが、1歳未満は心配」と言われ、しっかりとした予防・保養（ストレス・リスクの低減）と検査、何かあった時の早急な治療が必要不可欠と感じた。

ちなみに30歳の僕は？ と質問したところ、30歳でも検査は必要との事。自分もしっかり検査しよう。

ウラジミル・チエルネンコ 副大臣と会談

事故直後からの政府の取り組みや対応などを話していただき、教育から復

興対策まで、政府としての26年の経験
を踏まえた対応が見えた。

その後、副大臣に直接飯館村の写真
を見ていただけた。

ベラルーシとの地形の違いや汚染状
況など話すにも、まずどんな所なのか
を知っていたかどうかと思ひ、飯館の春
夏秋冬の写真を持って行っていた。私



ベトカ地区病院でホールボディカウンターを受ける佐藤さん

の家の周りの状況や家族の事などを精
一杯伝えた。

いつの間にか、周りに人が集まり写
真を覗き込む。まるでこの1年、日本
の状況が何も伝わっていないかのような
だった。

だが、真剣に見入るまなざしは、奇
しくも同じ汚染地域になってしまった
福島と同じ痛みを共有し、国や立場を
超えた人間関係を築いていける確かな
まなざしに感じた。

当事者同士が情報を共有し伝え合う
事から、未来への光が見えてくるのか
もしれない。

25日、情報センター

誰しものが集まりたくなる様なオシャ
レで近代的な会議室。中には出版部も
ありチエルノブイリ後の選択しきれな
いほどの多種多様な情報をまとめ、確
かな情報を発信する。

汚染マップ、土壌や作物分析、資料作成。学校に食品測定器を置き子どもたちへの教育を通して、家庭に浸透させていく方法。

土壌の改良・研究、食品測定や食品の基準値、健康診断、保養にいたるまで、様々なデータが集められ発信されている。

今の福島には、早急に官民一体のこういう物が必要とされている。



誕生日の乾杯をする佐藤さんと鎌田理事長

実はこの日は、私の記念すべき三十路の誕生日、まさか30歳をベラルーシで迎える事になるうとは夢にも思わず、何やら運命めいた物を感じた。

ベトカ地区病院

26日、ミンスクからゴメリに移動、ベトカの病院に向かう。

ナターシャさん、ラリーサさん2人のお母さんから話をうかがう。

食べ物は何で買ひ、山の物(きのこ、ベリー)は食べない事、親も子も検診がある事(年1回)、当時は外遊びが制限されていた時があった事、当時、ホールボデイカウンターで内部被曝が高かった場合はミンスクの病院で検査を受けた事など、話してくれた。

放射線人間環境センター

27日、放射線医学人間環境センター

を視察。

ここは、チェルノブイリの影響の研究もしている。

甲状腺障害はチェルノブイリ原発事故と結びつくとの事、当時10代半ばだった人は今は40代の為、甲状腺ガンは子どもだけでなく大人にも増えているとの事。

「日本には高いレベルの科学がある、ベラルーシには経験がある」「日本では、定期的な一般の検診で大丈夫と考える」と言われた。

ベトカ市役所

ベトカ市役所へ向かいベトカ市長から話を聞いた。ベトカは原発からは離れているが汚染された農村地域である。農業、土壌、除染、移住、学校の事などの話を聞いた。どこか状況が飯館と近い物を感じる地区である。

今でも2220ギガベクレル以上汚

染されている所もあり、汚染地域に住む家族への住宅支援、子どもには食料や保養の提供、食品測定も無料との事。

放射線学研究所

化学的な信頼できる情報を得る事。放射線学研究所の大きな役割は内部被曝を下げる事で、その為にも外部被曝も測っているとの事。

少々時間が少なく質問はできなかったが、ベラルーシには、木材やコンクリートにも基準がある。日本でも、木材やコンクリートや食品の基準を早く決めないとならないとの事。「大事なものは、使える経験があるかないかである」と話された。農作物は、畑によって何を作るかを決め、汚染度により畑を使い分け、肥料も使い分けている。

その他、プルトニウムなど様々なデータがあり、まとめられているとの事

だった。

こういうデータを日本の土壤汚染状況と照らし合わせ分析しフィードバックしていく事が早急に求められているのではないかと思う。

飯館村の為に今後さらに教えていた、たく事がたくさんありそうだ。是非、農業者、農協、行政職員につながってほしい所の一つである。

ゴメリ州執行委員会

副知事 ピョートル・ネステンコ氏の「喜びより、不幸は人々をより近しくします……」という言葉が印象的だった。

チェルノブイリ子ども救援

28日、チェルノブイリ子ども救援。海外からの支援により、子どもたちの

保養の援助や汚染地区の仕事の援助をしている。1989年から子どもたちの支援をしているが、政府だよりではなく、自分たちで動かなければならないと話していた。

ベト力保健局

市民市場の奥の食品測定所、測定器は8個あり1個はサーベイ用、1個は予備。食品ごとに細かく基準値が決め



ベト力地区汚染地に住むご夫妻

られており、基準を超えた物は没収され報告される。

市民に聞くと、市場に並んでいる物は安心という認識を持っているとの事。

その後、汚染地区の数カ所の村を回り、サマシヨール（自発的な帰郷者）のご夫妻のお宅訪問。

広い土地の静かな風景、馬と猫と鶏、室内には立派なベチカストーブ、家の裏手にはサウナ、地下には食料保存庫となんとも贅沢なくらし。

なんと病院には馬車で行くそう。年に1回は健康診断もして、水も測っているから大丈夫との話。

「私たちより街に移り住んだ人間の方が早く死んでるよ（笑）。ストレスだな」と、いたって明るい。

帰り際に手を振って寂しそうに見送ってくれたお父さんが、僕が避難する時に見送っていた父親の姿とかぶった……。

こうして全訪問日程が終わった。翌日、ミンスクに移動し、鎌田先生、神谷さん、イリーナさんと別れ、私たちはイスタンブール、関空経由で羽田に帰ってきました。

帰りもトランスファアの為、関空で荷物を受け取ろうとしたら僕の荷物だけ行方不明に。よくある事とは聞いていたが、まさか自分が！というおまけも経験させていただきました。

後日見つけられましたとの連絡、僕より数日間長く海外を旅したバッグは、どことなく一回り大きくなった様なおまけ……（笑）。

福島とベラルーシを繋ぎたい

最後に今回の訪問を終えての感想を述べたいとおもいます。26年という時間の経過は大きく、2年目の私たちの

状況とそのまま重ねる事ができない現実がありました。

しかし、私たちが学ぶべき事は確実にあり、原発事故の被害者同士としてベラルーシの方々とは福島の出來事を共感し合う事ができ、様々な情報を提供すると言っていただけでした。

今回が私にとってすべてではなく、これからつながって行く為の大きな第一歩目を踏み出させていたのだと思っております。さらに様々な角度から穴になっている所を埋め、今後、どうして行くかの判断材料を増やし、進んで行こうと思います。

今回、このような貴重な出会いをいただいた、ありがとうございました。これまでしっかりとした信頼関係を築いてこられたJCFの皆さんの努力とご尽力があったからこそと、心から感謝致しております。本当にありがとうございます。

さらに、この出会いをきっかけに福島とベラルーシを繋いでいく事ができれば、福島の再生にも大きな追い風になると確信しています。

どんな未来に

したいですか？

横内香苗（事務局）

昨年の原子力震災後の5月からJCFはガラスバッジプロジェクトを開始、南相馬を中心に50人の方々の毎月の積算外部被曝量を測るため月末に福島を訪問し、バッジ交換を行ってきました。途中から加わった私は2月末の訪問を含め計6回訪問しました。日本チエルノブイリ連帯基金が松本で発足して21年。まさか自分の国で放射能にかかわるとは思ってもみませんでした。事故から1年、最近あらためてグランドゼロやインターネット動画などを見ながら当時を振り返っています。

2月末の福島訪問では、JCF事務局で食品の放射能測定に関わっている信州大学の学生さんも同行しました。特に放射能測定所を見学したいという

事で今回は福島県内4カ所の測定所を訪問しました。

その測定所の様子を拝見させて頂く事で、始まって間もないJCFの測定所もきつと皆様のお役に立っていかると確信した訪問でした。2カ所の測定所は個人で始めた所です。どちらもお子さんの健康を心配して始まった計測ですが今では一般の多くの方に役立つ頂いているそうです。測定の正確さは経験を積む事が大事だと思いました。

ガラスバッジ装着者の中で妊娠中だったお母さん方も全員出産を終え、今は育児に励んでいます。母乳を与えているお母さんも、ミルクを与えている方も内部被曝の心配をしています。ミルク用のお水は心配なので皆さんミネラルウォーターを購入しています。

心労に加え経済的負担も加わっています。行動記録によれば週末避難を避けるべく被曝を避けるように工夫している方もいます。ガラスバッジを装

着している赤ちゃんはまだホールボディ検査ができないので、希望するお母さんが検査を受ける事も決まったそうです。

関わった方の内、現在までに5組の家族が県外に引っ越しました。市内にも線量の高い地域があるので何度か住居を変えている方もいます。線量の値を見て気になるお宅は原町中央産婦人科の高橋院長の指導で除染をお勧めしています。しかし除染してもその後また線量が上がってしまうので除染は何度も必要です。市内の住民は除染の順番を待っています。市で行う除染を待たず、市民独自で動いている地域もあるようですが、活動に出られない場合は出不足金を請求される地域もあるらしく、お年寄りだけになってしまった地域はどうしているのかと心配です。

妊婦、子どものいる家庭を優先している除染チームもあります。山際だけでなく、街中でも環境によって線量の高

い場所がある事もバッジを付けた事で分かりました。周辺の樹木が影響しているようです。「事実を見て行かないと計画が成り立たない」とおっしゃる方もいました。

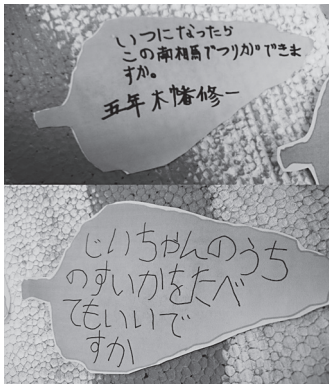
1年間のバッジ装着プログラムは4月末で終了します。見えない放射能を実感し、生活に役立てていただけだと思います。訪問を重ねるたび、街の回復は一見進んでいるかのように見えます。お店もずいぶん再開してきました。しかし自営でご商売をしていた方のご苦労が多く、高齢の方は病気がちになつていられるというお話も聞きました。

東電への請求は飯館と南相馬で3割しか提出されていないそうです(2月末)。保障の問題、健康、環境など課題はまだ続きます。

皆さんの募金により購入したガイガーカウンターの内、3台をお貸ししている南相馬市原町区内のコミュニティカフェ・べんりDaDoを訪問

しました。このカフェはボランティアさんの情報交換の場でもあり美味しいコーヒーも提供しています。ガイガーカウンターは1週間を目安に無料で貸し出ししているようですが、お役に立っている様子でした。

市内で開催された「南相馬ダイアログフェスティバル」のイベントの一環で、「想いのツリー」を作ったそうです。大きなさくらの木とけやきの木を描いたボードに「どんな未来にしたいですか?」「一番知りたい事は何ですか?」の問いかけに対するひとり一人のメッ



子ども達からのメッセージは胸をつく



「想いのツリー」にメッセージを貼る

セージが貼りつけてありました。花びらと葉っぱの形に切った紙に子ども大人もそれぞれの思いを書きました。子どもの字で「じいちゃんのうちのすいかをたべてもいいですか」「おそとであそびたい」……。大きな木が思いと

希望の花びらで埋め尽くされました。当たり前の方が当たり前でできないのです。

そんな中、市民は自分たちで立ち上がるべく懸命でした。支援を必要とするご家庭には、地元の相双民商のボランティアさんや議員さんが同行してくださいました。外から入ったJCFが関わることでわかった生活弱者と思われる方の情報を提供し、地元でサポートして下さる方に引き繋ぐ事もできました。地元の議員さんも市民の要望を議会に提案するために耳を傾けて下さいました。地元の除染研究所は「南相馬の復興を市民が主役となり行い、南相馬ブランドにしたい」と話して下さいました。子ども達の未来のために楽しく街を復興する事に関わろうとアイデアも豊富でした。「やりたい人集まれ！」「発想の転換で今までのパターンを変える」「当たり前のことをする」。イメージしたら未来はもう実現して

いると思います。あれから1年、人は立ちあがったら早いのではないのでしょうか？「5月にリオデジャネイロで開催される地球サミットにも参加したい！」「世界にアピールしたい！」という言葉は痛みを経験した方々の底力を感じました。

地元の皆さんは1年を振り返り、今は笑って当時の話をするのです。でもその話を聞く私は笑いながら涙が出てしまいました。津波が来て目の前で家を失った方、「自分は集団生活ができない」と思い、避難勧告が出て迎えに来たバスを見送った方、話をしたくて仮設にオープンしたラーメン屋に毎日通う方。お一人お一人に物語があり、それは今も続いています。人と関わり、人と接することで支え合っているように見えました。

震災当時、南相馬の人口は7万人から1万人に減ったそうです。現在は

4万人。3月末を境に戻ってくる方、引越す方の移動が多くなると予想されます。

ブランドゼロ90号でもご報告しましたが、二本松市内の同朋幼稚園にガイガーカウンタを25台お貸ししました。今までに約90名の方に利用して頂けたそうです。日常の被曝を軽減するために役に立ったと知らせて下さいました。園の周辺の方も時々借りに訪れるそうです。線量を自分で測る事により見えない放射能を実感して頂く事ができた様子です。また、3月からはガイガーカウンター15台を福島市内の南福島保育園にお貸ししております。園児142名、学童保育園も隣接する24時間オープンの大きな園です。他の園とのネットワークもあるので皆で使わせて頂きますとの事です。

この1年、市民の力も大きいですが、外から南相馬に入って共に暮らしながら支援している方にも何人か出会いま



横山さん宅で、左から横内、横山益子さん、中央奥が横山邦彦さん

した。JCFも現地の方の協力に支えられ、お陰で福島支援を続けて行う事ができました。

お宅におじゃまさせて頂き、食事を共にしながら未来の事を語り合う時間はとても楽しいです。震災後、仮設に再開したラーメン屋で働くおばさんは

いつも明るく周りを元気にしています。話をしたくてお店にやって来る人もいると言います。ご自身のお宅は津波で失ってしまったのに「もう失う物は何もない」と仮設に開設予定の診療所のオープンを楽しみにしています。

「避難先の新潟での数カ月も毎日楽しかった。どこに居てもすめば都！」と明るいパワーの源はどこから湧きでて来るのでしょうか？ 仮設にオープンする「絆診療所」はきつと訪れた人を笑顔にする場になる事でしょう。経過をたどるには過程が必要だと思えます。その先に見えている未来はとも明るいと訪問するたびに実感します。それは目に見えないかもしれませんが着実に良い方向に向かっていると思います。

南相馬を訪問した3月2日、福島県内の高校は卒業式でした。小高で被災し、家族で二本松に引っ越しをした鶴島さんのご長男も無事卒業式を迎えま

した。野球を続けるために部員皆、同じサテライト校に転校しこの1年を乗り越えました。制服は野球部の後輩に引き継ぐのだそうです。「無事に卒業できました」という御礼の言葉の重みを感じました。

今、松本市内の美術館では「シヤガール展」を開催中です。マルク・シヤガールは、現在のベラルーシ（当時帝政ロシア）のヴィテブスクでユダヤ人の家庭に生まれました。彼の絵の背景の多くに故郷が描かれています。シヤガールは、1985年（チェルノブイリ原発事故の1年前）の3月28日にこの世を去りました（1979年3月28日にはスリーマイル島原発事故が起きました）。故郷ベラルーシと日本の空は繋がっています。戦争をしないと誓った日本で放射能事故が起きてしまいました。シヤガールが生きていたら日本の風景をどんな色に描くのでしょうか？

チェルノブイリ：放射能と妊娠



2011年11月にベラルーシ共和国ゴメリ州ベトカ地区から地区病院長、ジミナ・ナジエーシダ先生が来日し、講演会を行った。先生は、放射能防護対策として、現在ベラルーシで周知されている事例を挙げて話された。

その時のテキストが「チェルノブイリ 放射能と妊娠」である。

「チェルノブイリ 放射線と妊娠」

☆2005年ミンスクのベラルーシ赤十字社で発行

☆妊婦と胎児の成長への放射線の影響

☆高汚染地での妊婦の生活の基本

☆放射線リスクの高い地域での妊婦に特有の情緒面の問題

興味深い内容の中から、汚染地での妊娠中の女性の生活の基礎について、抜粋し、紹介します。

☆翻訳協力

吉原 深和子

北岡 千夏

田中 里恵

山口 裕之

妊婦の外部被曝量を

減少させる方法

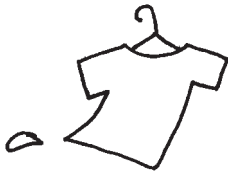
①なるべく戸外のほこりを浴びないようにする。

②靴についた汚れを落とし、落とした汚れは水で洗い流す。

③服はこまめに洗濯する。

④屋内はこまめに水拭きしてください（掃き掃除ではなく、拭き掃除です！）

⑤なるべく戸外のほこりを吸い込まないようにする。ほこりっぽい道は、通



らないようにする。風の強い日は外出しない。ほこりを浴びないように、風下ではなくて風上を歩く



こと。ほこりが舞い上がったら、息を止めてください。

⑥毎晩、鼻咽喉と目を、あたたかいうすい塩水で洗うこと。こまめに入浴すること（とくに夏期）。

⑦通風口には、水洗いのできる布製のフィルターを取り付けてください。

⑧野山での散歩や、畑仕事は控えましょう。

⑨やむを得ずほこりを浴びる作業を行う場合は、防塵マスクを装着すること。マスクは時々水洗いしましょう。



食物による内部被曝を

減少させる方法

内部被曝は基本的に、食物と水によって摂取される放射性セシウム137によるものです。

セシウムはカリウムに似た性質を持っています。カリウムは、地球上のすべての生き物（植物、動物そして人間）にとって必要不可欠な物質です。セシウムが存在すると、生物はカリウムと間違えてどんどん吸収してしまいま

す。放射性セシウム137は人間の胃から血液に吸収され、さらにカリウムと同じように体中の細胞組織に組み込まれ、蓄積されます。ですから、身体全体が均等に被曝することになります。しかしカリウムと同じようにセシウムも、ある一定の条件を守れば、簡単に体内から排除することができ

食物の放射性物質の含有量を 下げる調理法

食品を調理加工することによって、放射性物質の含有量を大きく抑えることができます。例えば、加工によってセシウム含有量は、魚は87〜99%減少し、牛乳は85〜90%減少します。

牛乳をクリームに加工すると、放射性物質の含有量は85%減少します。カッターチーズに加工すると(家庭で加工した場合も含む)、ストロンチウム90の含有量は60〜80%減少し、セシウムは85〜90%減少します。なぜなら放射性物質の大部分が、乳清(ホエー)に移行するからです。

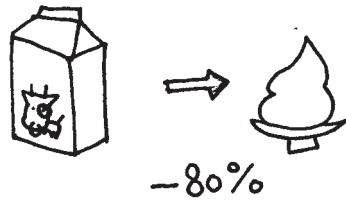
バターの放射性物質の含有量は、原料の牛乳に含まれている含有量の3%です。

このように、牛乳を加工することに

よって、含有量を5分の1〜10分の1に抑えることができるのです。

きのこのセシウム汚染率は、現在も非常に高く、1日分の食料に含まれる放射性物質の大部分が、きのこ

によるものです。しかし調理加工することで、含有量を82〜93%減らすことができます。



放射線物質の含有量を減らすための調理法は数多くありますが、その中でもよく知られている簡単な方法を紹介します。

☆食品の外側についた汚れを洗浄機によって落とす。

食品の外側についた汚れを洗浄機に

よって落とすことによって、食品の表面および上層部に含まれる放射性物質は50%減少します。

・食品に付着した砂・埃・泥によって放射性物質は、体内に取り込まれます。したがって、砂や泥が付着したり、泥などが入り込んでいる可能性のあるひび割れや凸凹した表面、くぼみはすべて除去してください。

・キャベツ・たまねぎ・にんにくの外側のもつとも汚れた葉や皮は、捨ててください。

・きのこは、付着した泥・埃・落ち葉を除去してください。

・食品の汚れを除去したら、流水でよく洗ってください。

・野菜(にんじん・ジャガイモなど)は、皮をむく前に、きれいに洗ってください。

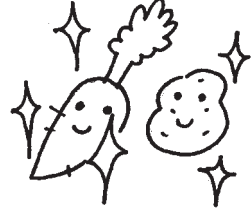
・食品の表面が粘性でべたべたしている場合は(例えば、きのこ・魚など)、水に重曹を溶かして洗ってください。

洗った後で、外側の皮を取り除いてください。

・新にんじん・

新ジャガイモの場合も、皮をそぐのではなく、

きちんとむいた方が安全です。根菜の皮の部分に、根菜の本体の2〜3倍の放射性物質が濃縮されているからです。



・魚は、よく洗った後で皮を取り除き、ひれ・頭・内臓・えら・骨も取り除きます。その後で、もう一度洗ってください。

☆水に浸す

高度に汚染された食品（きのこ・森で採れたベリー類・肉・淡水魚など）は、2〜3時間きれいな水に浸してください。

（*注 ベラルーシの「きのこ」は、日

本で一般に販売されている園床栽培の物とは違う「自生きのこ」

きのこ類（生きのこ・乾燥きのこ）は、3回ゆでこぼしてください。1回目は15分間、2回目は30分間、3回目は60分間ゆでてください。

・干したきのこは、2%の食塩水に、30分・2時間・10時間と、3回水を替えてさらした後、ゆでこぼします。

・肉と魚は、各5グラムの切り身にして、時々水



を替えながら、4%の食塩水と3%の酢水に、交互に24時間浸けます。こうすることで、セシウムの含有量は87〜99%減少します。

・漬け汁を替えながら、食肉を長時間漬ける（マリネにすると、セシウムの濃度は2分の1〜3分の1になります

（ただし、漬け汁は捨てること）。

☆塩漬けにする

・野菜やくだものは、塩漬けにすると、セシウムの含有量は2分の1になります。

・しかし漬け汁は捨ててください。漬け汁に、放射性セシウムが排出されているからです。

☆ゆでる

・食品に含まれる放射性物質や、その他の有害物質（重金属や硝酸塩など）を取り除くためのもっとも手軽な熱による調理法です。

・ゆでることによって、放射性物質はゆで汁やブイヨンに排出されます。たとえば、食肉（牛肉・豚肉・鳥肉・兔肉、魚肉）に含まれる放射性物質の80%がブイヨンに移行します。根菜類に含まれる放射性セシウムの50%が、ゆで汁に排出されます。ですから、ブイヨン

やゆで汁は必ず捨ててください。

・スープを調理する場合は、まず食品を5〜10分間ゆでこぼしてから、新たに水を加えて調理して下さい。

・食品を焼いたり炒めたりしても、放射性物質を排出することはできません。むしろ濃縮されてしまいます。

・焼いたり炒めたりする場合は、まずゆでこぼしてから、調理してください。

食物に含まれる放射性物質を体内に吸収せずに排出する方法

・放射性物質の体内への吸収・蓄積を抑制し、排出を促進させるには、二つの方法があります。

①食事の質を変えること

②消化管からの放射性物質の吸収を阻止して、蓄積した放射性物質の排出を促進させる特定の食品、薬剤、補助食品を摂取すること

質の高い食事とは

現在では、放射能による問題よりも質の悪い食事による悪影響の方が大きいのだと専門家は述べています。食事の質を高めることによって、放射性物質の吸収率を下げるだけでなく、妊娠さん自身の健康を大きく増進することができます。質の高い食事は、放射能を含む環境汚染による有害物質に対する抵抗力を高めてくれるのです。

☆質の高い食事とは

①有害な成分を含まないこと

②十分な量の必要成分を含んでいること

①についてはすでに前章で述べましたので、ここでは②について詳しく説明しましょう。

第一に重要なのは、妊娠時の過剰な体重増加です。妊娠時の食べすぎは栄

養不足と同じくらい胎児の健康にとつて危険なのです。検診のたびに徹底した体重管理を行なうのはそのためです。

過剰な脂肪分は心臓病や血管の病気を引き起こすだけでなく、新陳代謝のスピードも下げてしまうので、体内の放射性物質を排出するスピードも遅くなり、放射性物質やその他の有害物質の体内濃度が高くなってしまいます。ですから、高度に精製された食品（精製油脂、精製された小麦を使用したパン、菓子類：ケーキ・パイ・チョコレート・クッキー・砂糖）を摂り過ぎないようにしましょう。高カロリーの食品はたとえ少量でもエネルギーの摂り過ぎにつながり、脂肪や血中脂質を増やしてしまいます。

野菜、とくに低カロリーの野菜（ピーツ・大根・にんじん・キャベツ・きゅうり・トマトなど）をたくさん食べるようにしましょう。少なくとも1日に4回食

事の時間を取りましょう。腹八分目の状態で食事を止めて、その2時間後にまた少量の食事をするようにしましょう。

人間の食事に不可欠な成分は、たんぱく質・脂質・炭水化物・ミネラル成分・ビタミン群です。これらの成分を一定の割合で、十分に摂取しなければなりません。

毎日欠かさずに牛乳・乳製品・肉・魚・野菜・果物を食べるようにしましょう。これらの食品が不足すると、身体に必要なカルシウム・ヨウ素・銅・亜鉛・コバルト・ビタミンC・カロチンを含むビタミンA・E・P（ヘスペリジン）・B等が摂取できません。

牛乳や乳製品（発酵乳・ヨーグルト・カッテージチーズ）が不足すると、身体に必要なたんぱく質やカルシウム塩類が摂取できません。

たんぱく質が不足すると、消化系・

内分泌系・造血器官等の機能が低下します。労働能力（まず知的能力）が低下し、有害物質に対する抵抗力が低下するので、放射性セシウムやストロンチウムの体内濃度が高くなり（40〜60%）、さまざまな疾病の回復が遅れます。

牛乳と乳製品は、カルシウム塩類を摂取するために欠かせない食品です。牛乳に含まれるカルシウムは、カゼインによってたんぱく質と結合しているので吸収率が高いのです。

カルシウムが不足すると、カルシウムと性質の似ている放射性ストロンチウム90の吸収率が高くなります（20〜30%から60〜70%）。ストロンチウムが骨組織に蓄積されて骨髄が被曝した場合は、なんとしても消化管にストロンチウムが吸収されるのを阻止しなければなりません。その方法の一つが、牛乳や乳製品に多く含まれるたんぱく質とカルシウムを十分に摂取すること

です。

したがって、牛乳や乳製品をたくさん摂ればとるほどカルシウムの摂取量が増え、骨に蓄積されるストロンチウム90の量が減ります。

毎日欠かさず野菜・果物・青菜を食べるようにしましょう。これらの食品には、ビタミン・ミネラル・食物繊維等が多く含まれています。野菜や果物が不足すると、ビタミンやミネラル塩類（カリウムを含む）の代謝が悪くなつて、排泄による代謝のリズムが崩れます。これらの食品には、セルロース・半セルロース・ペクチン等の食物繊維と呼ばれる成分が多く含まれています。これらの成分は便通の正常化をうながし、放射性物質を含む有害物質を大便と一緒に体外へ排出させます。

野菜と果物は、カリウムや多くの微量元素を摂取するための重要な食品です。カリウムが不足すると、カリウムと性質の似ている放射性セシウムの体

内蓄積量が増えてしまいます。

成人の体内のセシウム137が半減するまで100日間かかりますが、カリウムが不足すると140〜170日間になります。つまり被曝線量が増加するのです。

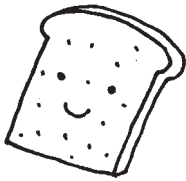
放射線リスクの高い条件下では、野菜や果物を十分に摂ってください。前菜（キャベツ・きゅうり・トマト・青菜・ピート・ラディッシュなど）、メインディッシュの付け合せ、野菜スープにして食べましょう。

このように野菜や果物は、カリウム・銅・鉄分・食物繊維を体内に供給し、有害物質を体外に排出させ、最終的には被曝量（とくにセシウム137による被曝）を減少させてくれるのです。

放射性物質の体内への吸収を減少させ、体外への排出を促す補助食品

カルシウム塩類・リン・ペクチン・食物繊維・脱脂粉乳・昆布・麦芽エキス・フェロシン・ナトリウムとカルシウムを強化した食品が開発されています。これらの食品が放射性物質の蓄積を減少させる効果は、動物実験だけでなく人体においても研究されています。このような『予防』食品を摂ることによって（この他の数多くの対策と合わせて行なった場合ですが）、内部被曝をかなり予防することができます。

雑穀パンを食べることで、セシウム137の体外排出量を大きく増加させることができます。粗挽きパン



に含まれているイネ科植物の麩（ふすま・小麦を挽いて粉にした時にできる皮の層）にはビタミンB・マグネシウム・カリウム・セルロースが豊富に含まれているため、満腹感を与え、胆汁の分泌を促し、便通を正常化します。さらに放射性物質（ストロンチウム・セシウム）が消化管に吸収されるのをある程度抑制します。したがって妊婦さんは、全粒粉パンを欠かさずに食べるようにしましょう。

食品放射能測定の手続き方法

ベラルーシでの聞き取り調査からも、今後は食品や飲料水に含まれる放射能検査をすることによって、内部被曝のリスクを回避することは重要な課題です。

JCFは「JCF-Team めとば」（次ページ以降に関連記事）による食品放射能測定を行っています。

市民の皆様からの測定のお申し込みも受け付けています。

皆様からの持ち込み食品だけでなく、公共に資するもの（給食食材等）、一般的には測定されていないものの測定にも定期的に取り組みます（幼児の口にするもの・飼料・加工食品・嗜好品・山菜など）。

使用検査機器

日立アロカメディカル株式会社

NaI (TI) シンチレーションスペクトロメーター CAN-OSP-NAI

受付対象試料

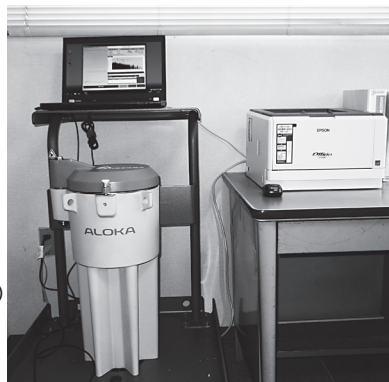
- ①食品（自家栽培作物・流通食品）
- ②飲料水（水道水・井戸水）

検出限界：セシウム -134・セシウム -137 合算で 20Bq/kg 以下になるように時間設定して測定します。

検査費用（1 検体）

- ・ JCF 会員：1,000 円（一般 2,000 円）
- ・ 法人： 5,000 円（要相談）

*必ず事前に事務局に電話（0263-46-4218）で予約お申し込みをお願いします。
測定依頼書をファックス等でお送りします。





JCF-Team めとばの皆さん（左から佐藤さん、川島さん、水瀬さん、比嘉さん、浜崎さん、神谷事務局長、三輪浩名誉教授）

『Teamめとば』に期待する

三輪 浩（信州大学理学部名誉教授）

日本チエルノブイリ連帯基金が「食品等放射能検査機器」を導入して、援助活動を進めている東北の原発震災被災地域からの検体検査の他に、長野県内の一般の希望者からの食料・飲料・土壌などの検査も受付けることになった。

検体の数も増えることから、信州大学の学生に機器の操作を手伝ってもらえないだろうかという主旨で相談を受けた。

私自身は、チエルノブイリ事故直後から、簡易放射線検知器「R-DAN」で、市民が空間放射線量を常時監視する運動に関わってきた経験から、フクシマ事故に関しても広範囲の放射能汚染の状況を把握し、今後長期に亘るであろう食品等物資の流通に伴う放射能の拡散を、行政だけでなく市民レベルでもモニターすることは有意義で必要なことと考えていたので、理学部物理科学科の学生にあたってみることになった。

導入された放射能検査機器の取扱いは特に難しいものではなく、手順書に従って通常のパソコン操作をすれば、放射能についての特別の予備知識や放射線測定の実験は無く

とも一応の結果は得ることができ。日常的に長さや重さあるいは温度などを測る機会は少なくないが、最近の機器にはデジタル表示されるものが多く、記録をとるのには便利になっていく。これらの測定は、元来五感に頼る測定道具を使って目盛を読むというアナログ操作の経験があるので、測る前からおよその見当がついていて、思いがけない数値が出れば、数字の読み違い・手順の誤り・装置の不具合等々再点検して、場合によってはあらためて測り直すこともあろう。

しかし、放射線が相手となると、測定システム全てがブックボックスで、キーボードと表示画面とを通しての情報やりとりで事が運ばれて行く。そういう場合には、測定の原理や装置の仕組みがある程度理解できているか否かは、説明書に指示されている測定前の機器の調整・試料の準備・測定結果の数値の解釈等々それぞれの過程で、装置を使いこなすか、それとも「装置に使われるか」大きな違いが出てくる。物理を学んだ学生なら装置の実力をうまく引き出すことができるだろうと考えてのことである。

四月からの大学院進学が内定している学生達に声を掛けてみたところ、予想したよりも多くの人数が応じてくれ、『JCF・Teamめとば』が発足した。単に頼まれた測定

作業を引き受けるのに止まらず、測定室の備品や環境の整備、松本市の学校給食への取組、他の民間測定所の調査・連携等々、これまでJCFのスタッフだけでは手が回らなかった点にも積極的な提案や活動目標が出されている。

このところ、最近の若者が自分の仲間内のグループに閉じこもりがちで、外の社会への関心が薄いといった評論を見聞きすることが多かったたので、私にとってここ一月月のチームの動きは期待以上のものである。東日本大震災とフクシマ事故を受けて、日本社会全体が「生き方を見直す」中で、学生諸君も何か自分の関われる場を模索する気持ちに合ったタイミングだったたのかもしれない。幾つものマスコミからも着目されて取材を受け、まずは順調な滑り出しである。

JCF事務所の一隅にはチームのための控えコーナーが設けられ、幸い信大の研究室も近いので、大学院進学後の勉強研究に支障のない範囲でチームワークで測定が継続できるようお願いしている。時には口も出しつつチームの活動を見守っていくのも、仲介した立場からの私の責任かとも考えている。

僕らの取り組み

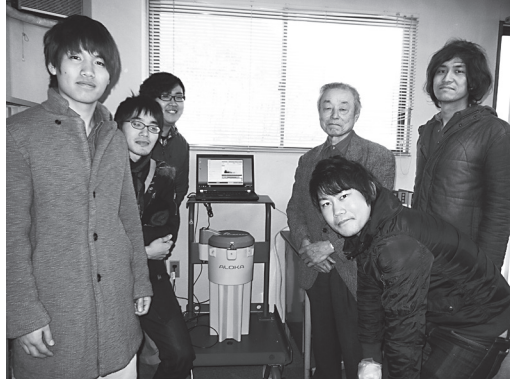
浜崎 竜太郎

「JCF・Teamめとば」は、JCFの食品放射能測定器(CAN-OP-NAI)を使って食品や飲料水などの放射能を測定して、放射能と付き合い将来を担う子ども達のより安心、安全な生活の実現に貢献していきたいと思えます。

Teamめとばの

設立経緯

JCFの呼びかけにより三輪浩・信大名誉教授の仲介を受け、信大理学部・物理科学科4年生の有志7人によって市民放射能測定所の機能としては全国的に唯一の学生組織「JCF・Teamめとば」



測定器の前で左から佐藤・比嘉・水瀬・三輪・浜崎・川島の皆さん

を2012年2月1日に結成するに至りました。「Teamめとば」の「めとば」とは事務局の窓から見える松本の中心を流れる「女鳥羽川」の名前から取りました。

Teamめとばのビジョン

大震災からの復興、再生は国、企業、個人として多種多様な責任・役割・行動が明白になりました。「Teamめとば」は個人の集まりであるチームとして、復興・再生に関する社会貢献として何をすべきなのか？ 何ができると、何をするのか？ を持続的に熟慮すると同時に、現段階での次のスローガンを掲げます。

「放射能がある世代の）子ども達に笑顔を！」

- ・このスローガンを元に以下の行動指針を掲げました。
- ・主体的に活動し、挑戦、感謝、正直なる事を忘れない。
- ・私たちが自身が問題意識を持ち自己成長をする。
- ・JCFの会員さんや支援をして下さる方に対する責任を果たす。

Teamめとばの役割

以上のビジョンを元に「Teamめとば」の役割です。事故後、食品の安全性を示す指標として放射能が加わり

ました。私たち「Teamめとば」は、測定依頼などを通じて自分そして子どもが口にする食品がその指標に関して安全かどうか判断するための情報を提供し、市民、自らが将来の放射能とどう付き合っていくか、自発的に考えられる基地として機能できればと考えています。

Teamめとばのプロジェクト

「食品の放射能測定」がメインプロジェクトです。放射性物質は無色透明、無味無臭で人体に影響する事が根源的に不安を与えます。ただ必要以上の心配をする前に私たち「Teamめとば」に測定の相談をして下さい。測定検体については確かな判断基準による食品放射能測定をします。

4月には文部科学省の放射線審議会が野菜類、穀類、肉、魚などの一般食品の放射性基準を放射性セシウムを100ベクレル/kgに引き下げます。新基準値を上回る線量の食品は、松本市では農産物としては出荷されにくいと思います。

しかし新基準値より低い放射能だから安心、安全と短絡的に結論を出すのではなく、ICRP（国際放射線防護委員会）、ドイツ放射能防護協会などの基準値を提示すると共に、多視点的に依頼者の方に判断していただく事を提案

いたします。

そのために食品放射能測定の精度を上げる事、その結果の理解をTeamめとばの使命として日々努力したいと思います。

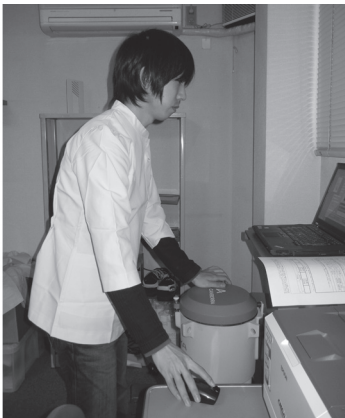
また「給食プロジェクト」「出前授業プロジェクト」などの放射線防護のためのプロジェクトも現在進行しています。

ではチームのみんなからも一言ずつ抱負を！

◆市瀬 和也

昨年の大地震による福島第一原発事故の影響は大きく、

食品や土壌の放射性物質による汚染は今や多くの人の不安の種となっています。東北地方のものに限らず、私たちの身の回りのものが放射性物質により汚染されているのかどう



測定する市瀬さん

か、そうだとしたらどの程度汚染されているのか。実際に食品や土壌などの放射線濃度を測定し、その具体的な数値を知り、それが安全なのかどうか判断し、私たちが置かれている状況を正しく把握することは大切なことだと感じます。

原発の事故が起きてからは全国各地の自治体や市民団体の放射線量の測定が行われているようですが、私もTeamめとばで活動を行う一人として事態を正確に把握する手伝いに勤しんでいきたいと思っています。

◆川島 徳巳

2011年3月11日、日本に未だかつて経験したことのない大災害が起き、特に福島第一原発の事故は今後何十年と日本が抱える問題となりました。私はTVや新聞でそのニュースを見ることしかできず、やりきれな



測定する川島さん

い気持ちでした。

そんな気持ちを持ちながら、ちょうど1年が経とうとしている時、このお話をいただき迷いはありませんでした。松本にいながら少しでも、不安になっている人の助けになれば、自分の学んだことを共有していければ、日本のこれからについて共に考えていければ、子どもたちの将来を守る手助けになれば……。

こんなにたくさんはうまくはいかないかもしれませんが、少しでも自分のできる範囲で頑張っていきたいと思えます。

◆佐藤 直

3・11とそれに伴うフクシマの原発事故は、日本人はおろか世界中に対して、大きな衝撃と生き方の見直しを突きつけました。拡散されてしまった放射能と、原発・エネルギーの未来は、今後人類が目を見背けずに付き合わざるを得ない問題です。

しかし、いずれ背負っていく大学生や子どもたちがそれについて学んだり考えたりする機会は少なく、ただ漠然とした不安があるのみです。

私たちは幸運にもいままで物理学を学ぶ中で原子力や放射線について勉強してきました。Teamめとばはそれを

活かし、日々の食品放射能測定から子どもたちや松本の人たちに少しでも安心と安全を届けたい。そして学生ならではの活動を通じて、子どもたちと一緒に自分たちの未来を考えていきたいと思っています。

◆高橋 栄也

東日本大震災によって起こった福島原発の事故による放射能汚染問題は震災から1年経つ今でも根強く残っています。日本に住んでいる以上、今後決して無視のできない問題であります。

私はこの問題に關して、過度に恐れる必要はないと考えると同時に過度に無知である必要もないと考えます。

しかし、現在マスクミ等を通じて恐怖感を煽るような報道、また逆に安全だと思



検査依頼者に給食プロジェクトの取り組みについて説明する高橋さん

わせるような報道がなされています。

私はこの放射能測定プロジェクトでは、地域のみなさんと共に子どもを通じて放射線に対する正しい知識・考え方を身につけ、放射線問題の今後についてみなさんで考えていけるような土台作りのお手伝いができればという風に考えています。

◆比嘉 一志

福島原子力発電所から放射能もれが発覚し、それにもない、原発を廃止しようという活動が現在盛んにおこなわれています。

今まで原子力発電は、他の発電よりも同じエネルギーを低コストで得られると言われていました。原子力発電所の廃止にもなつて日本の科学や経済面において必要になる事として、原子力発電廃止を補うことができる人的無害な発電方法の構築、また一人一人が電気の使用に対して前よりもいくらかの制限を設ける、という事が挙げられます。Teamめとばでは、このような問題をまず私と同じ世代とともに学び、そして私たちよりも若い世代にある程度はつきりとした道を示す、ということを目指して努めていきたいと思ひます。

◆水瀬 友豪

「食品放射能測定プロジェクト」の話をいただいた時、興味があるだけという軽い気持ちで参加希望しました。しかし、被災地から避難して



測定する水瀬さん

きた人達から被災地の現状を聞いて、私達がこれから行おうとすることがどんなに重要なことか気付くことができました。

私が聞いた被災地の現状は、放射能汚染を受けた食品で給食を出しているということでした。この話を聞いた時、えもいわれぬ思いになりましたが、私自身が放射能をどうにかすることはできません。だから、食品放射能測定で何か力になりたいです。

また、子どもたちがこの問題に対して自分自身の考えで判断できるようにTeamめとばが導いていきたいです。

◆浜崎 竜太郎

2012年2月末、「Teamめとば」の発足に伴い福

島と伊那谷にある市民放射能測定所、数力所を訪問しました。福島県の測定所スタッフは放射能に対する知識また意識が想像以上に高く、ゲルマニウム半導体検出器を所持しスクリーニングとしてのNAIシンチレーション検出器としての利用を行っている測定所もあり、まさに汚染されている食品から全く汚染されていない食品まで許容する事を可能にしていました。

参考になる点が幾つもありました。長野県伊那谷の測定所では伊那谷産の農産物などからは放射能は基本的に出ないと考えるが、依頼者自身が自発的に測定する事により安心である事を自ら実感を持ってもらえると使命感を持っていました。私は測定依頼を通じ多くの方に放射能が不検出という安心を与える事で喜んでいただきたい、また必要以上に放射能を恐れないよう、その知識を共有して行きたいと考えています。



福島の市民測定所を訪問する浜崎さん

JCF・Teamめとばの皆さんは、お声をかけて下さった三輪先生のお人柄か、みなさん礼儀正しい好青年。

でもチーム形成から1カ月が過ぎて、シフト担当の日は1日中事務所に詰めて計測や資料収集で私たちスタッフとの接点も多く、お昼時間のおしゃべりからメンバーの個性的な素顔も見えて来て、真面目だけではないチャームポイントを発見の日々です。

リーグを買って出してくれた浜崎さんは歩くの大好きな山男^{ヤマボウシ}、山だけではなく世界中を歩いていて、研究室の机には「地球の歩き方」が壁のように並んでいるそうです。自称珈琲中毒の浜崎さん、研究室の国際会議では珈琲当番をしていたという噂も……。

市瀬さんは寡黙の人、でも計測結果についての質問には、直立不動で丁寧に答えてくれます。

パソコン得意な高橋さんは、「ピーナッツ（スノーピーの物語）」の世界から抜け出したチャリーブラウンみたいな（男の子）。涉外担当にびったりです。因に野球の腕前不明。

大学での教育実習で教えることの楽しさに目覚めた川島

さん。でもしかし、夢は映画関係の仕事に就く事だとか。がんばれ！

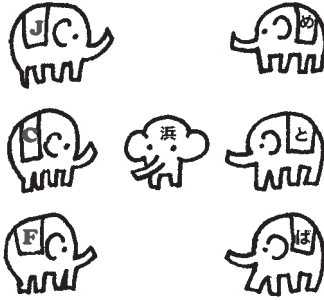
京都出身の水瀬さん、水瀬さんの関西弁の楽しいおしゃべりを聞いているとM-1グランプリの予選会場に来ているような気分にしてくれる「癒系」。水瀬さんが京都出身

と知って、京都のイメージが変わった（崩れた）という事務局スタッフも……。

チームスペースのIT環境を整えたり、ネット上にチームの資料や日報、事務局への連絡システムを作った佐藤さん、実はITだけでなく料理も得意らしい。噂ではスペシャルな日には薫製やピザも作ってしまうとか。

沖繩男子の比嘉さん。「比嘉の時間軸は僕らとずれてるんです」とチームの面々は言います。但しシフトの時間に遅れたことはありません。

メンバーにチームに加わった抱負を書いて頂いたら、「あんまり直球で彼らの楽しい個性が出てません」と事務局長。そこで布山が勝手に独断と偏見の付記を付けました。



seven

第11回JIM—NET会議

感染症対策研修等 支援続行を

佐藤真紀 (JIM—NET事務局長)



JIM—NET会議で発表するサルマ医師 (バグダード)

2月21、22日の2日間にわたり、イラクのアルビルでJIM—NET会議が開催されました。

日本からは、鎌田實医師、神谷さだ子事務局長、佐藤真紀、井下俊医師、阪口佳代 (JIM—NET駐在員)、坂下一夫医師 (信大小児科、リカ医師 (信州大学)、赤尾和美看護師 (カンボジア子ども病院) が参加しました。

イラクからは、バグダッド、バスラ、モスル、ドホーク、アルビルの6病院 (バグダッドは2病院) から合計16名の医師が参加し、ローカルスタッフを入れると25名を超える参加者でにぎやかな会議になりました。

まず、井下医師が会議に先立ちアルビル入りし、ホテルに缶詰状態で、各病院から送られてくる治療成績のデータをまとめあげました。私たちは、白血病の中でも一般的なALL (急性リンパ性白血病) の1カ月以内の死亡率に注目して、治療成績をあげるための

活動を行なっています。それまでは、10%を超えていた死亡率も2009年には、49%まで下げる事ができましたが、2010年には、5.8%、さらに今回の2011年には、7.7%と高くなってしまい、治療成績が悪化している事がわかったのです。

会議は、鎌田先生の冒頭の挨拶から始まりました。「日本はアメリカとの第二次世界大戦で、広島と長崎に原爆を落とされました。そしてたくさんの子供も達が白血病や小児がんになりました。2度と核爆発を起こすものを世界で使いたくないと思ってきました。生活を向上させるはずの原子力発電所がチェルノブイリで爆発しました。JCFはチェルノブイリの子供も達を助けるために、1991年から支援をしてきました。そしてJIM—NETを立ち上げ先生方とイラクの子供もを助けようと思ったのは、がんの原因がアメリカ軍が使った劣化ウラン弾ではな

いかと推測されるからです。放射性物質が戦争で使われないようにしたい。未来の子どもを守るためにそうしたいのです。そう思っていた矢先に3・11で福島第一原発が事故を起こしました。シヨックを受けました。JIM-NEETもJCFも全力を挙げて福島の子ども達に被害が及ばないように努力しています。この2日間のカンファレンスは、イラクの子ども達の命を救うためののですが、これからすべての放射能の被害が子どもたちに及ばないようにみんなが手を取り合って子ども達を守っていく、そういうスタートの日になればよいと思っています。そして、日本の支援が無駄にならないようにイラクの医師たちに協力してほしい。

次に、福島で買ってきたお土産のあ

かべこを各病院にプレゼントしました。あかべこは、その昔会津で、赤い牛だけが重労働に耐え生き残ったという言い伝えから、子どもが生まれると、無病息災を祈って贈られるとのことです。イラクのがんの子どもたちが生き残るようにという思いを込めて福島から買ってきました。本来なら治療中の子ども達全員にあげたいところですが、福島の応援にもつながるので次回はおもつとたくさんのあかべこを買って行きたいと思えます。

会議は学会方式で、医師達が事例を発表し、治療成績が落ちた理由をディスカッションしました。医師たちが紹介する病院の写真があまりにも汚いの



義理子ヨコの絵を描いてくれたハウラちゃんとおかべこ

に驚きました。患者数が増えており、病院のキャパシティをオーバーしてしまつて、ともかく忙しくて感染症対策などの十分なケアができていないようでした。ある医師からは、病院のスタッフを全員入れ替えて、海外から優秀なナースを入れればいいんじゃないかという意見も、半分本気で出されていま

した。正直なところ、この1年間は、金額では何とか支援の現状維持を行ないましたが、きめ細かな、技術指導などが欠けてしまったところがあつたようです。来年度は、赤尾看護師にも積極的に現地に行つて頂き、技術指導をお願いしたいと考えています。同時に、信州大学で医師と看護師が一緒になつて感染症対策を学べるような研修をしていただければ、結果が出せるのではとも思えます。

また、援助を緩めるわけにはいかないことを実感した2日間でした。



An Essay

NO.47

宮尾 彰

『はせがわくんきらいや』という絵本があります。

「はせがわくん」は、何をやっても皆と同じにできないひよわな男の子。語り手の「ぼく」は読者に、彼と一緒に過ごすのがどんなにしんどいことかを訴え、どうして彼がそんな体なのかを、何度も問いかけます。そして、長谷川くんなんかきらいや。

大だいだいだいだいだいきらいや。

常に足手まといの彼を疎ましく思いながら、どうしても放っておけない「ぼく」の叫びで物語は閉じられます。

一九五五年生まれの被害者長谷川集平によって、一九七六年に描かれたこの作品は、今もなお『森永ヒ素ミルク事件』を内側から告発して止みません。

「外に出て避難していました。その時は患者を抱いていました。もちろん被曝しました……」

先日私は、「農村医学」で知られる佐久総合病院の組合が東日本大震災を憶えて開いた講演会で、福島県の看護師による被災直後の証言を聴きました。

白衣の彼女の前に現れた警察官は、防護服に身を包んだまま『急いでここから避難してください！』と言い残し、その場から立ち去ったそうです。

あの『チエルノブイリの祈り』が、日本でも記されねばならぬことを肌身で痛感し、思わず合掌しました。

彼女の一言一句は「それを聴いて何をするか」以前に、「それをどう聴くのか」という公案です。

誰一人、それに答え得る者は居ませんでした。

唐木順三著『科学者の社会的責任』についての覚え書
(一九八〇年)が、一月筑摩書房から再版されました。

著者は、一九五五年物理学者ら十一名によって署名された「ラッセル・アインシュタイン宣言」から始めて、一九五七年カナダに科学者二十二名が集った「バグウオツシユ会議」、一九六二年日本国内の有識者二十一名が参加した「科学者京都会議」、核兵器を絶対悪と認めた一九七五年の「京都シンポジウム」までを丁寧に検証しています。

未完の *An Essay* は病床で綴られ、(以上、昭和五五・三・八・午前一時十五分書き終る)で閉じています。

湯川秀樹と朝永振一郎。同じノーベル物理学賞を受けた二人の文章に顕れた「科学者の社会的責任」に対する態度を執拗に問い詰める作業の跡が、絶え絶えの息遣いと共に伝わって来る、真に激烈な遺言の書です。

湯川が核開発に関わる物理学を「絶対悪」としながらも、随所で研究に伴う喜悦を漏らしていることを氏は徹底して糾弾します。他方で、晩年の朝永には明らかに罪の告白と懺悔が認められる、とその人間を評価しています。

彼の嘆きと怒りは、白井吉見があとがきで述べたように広島島の悲劇を体験しながらも、この国に懺悔や自己告発の出てくる「背景も基盤もなかった」ことによりました。

あの福島第一原子力発電所の事故から一年が経ちます。「科学者の社会的責任」は、今どこにあるのでしょうか。

自らもそれに加担した一人の人間として、核開発の懐く罪業をその内側から懺悔した物理学者。不器用な愛情表現に己が悲願を籠め、相俱に生きる子どもたちを描いた絵本作家。今も職務の傍ら、「フクシマ」の語り部として自らの壮絶な経験を証言し続ける看護師。

ここに、自らの生きる時代を、他人事ならぬ自らの歴史として引受ける意志を持った人間の姿があります。

懺悔や自己告発の出てくる背景と基盤は、かような人間による連帯の内にこそ生まれ育つのでしょうか。

人の内なる自然と人の外なる自然とが一如と成つて働き出す世界こそ、唐木順三の念願でありました。



ベラルーシの食卓

海のキャベツ（コンブ）サラダ

近年、アメリカスタイルのショッピングモールやスーパーマーケットができるまで、ベラルーシでは、どの町でも屋外の市場で、またミンスクとゴメリには大きなドームの自由市場があって食料品が売られていた。ミンスクの中心街にあるカマロフスキー市場は、90年代、JCFスタディーツアーの行程で必ず訪れた。広いドーム内には、野菜やブロックのお肉があふれていた。

今回の訪問は、食品の放射能測定システムを見るのが目的だった。測定器が数台設置され、専門の測定員が全食品を検査している。

今回の「食卓」はベラルーシで出会った、ヨードもたっぷり取れる昆布サラダをどうぞ。

<材料>

切り昆布 200 g・イカ 1杯・ニンジン 1/4本・玉ねぎ 1/4個
香草（万能ネギ、イタリアンパセリなど）少々・塩 小さじ1～2
コショウ 少々・砂糖 小さじ1・酢 大さじ2・油 大さじ2

<作り方>

1. 切り昆布は乾燥したものはもどして、食べやすい長さに切る。
2. イカの皮、内臓、足を取り、身を2等分にして細かく切る。
3. ニンジンをせん切りする。
4. 玉ねぎを薄くスライスする。
5. 昆布・イカ・にんじん・玉ねぎを油で炒める。
6. 5をボールに入れ、塩・コショウ・砂糖・酢を入れて、混ぜ合わせる。
7. 6を器に盛り、香草を散らす。

モスクワ便り



今年の3月のロシアのビッグ・ニュースと言えば、もちろん大統領選挙です。プーチンが大統領に返り咲くだろうことは、誰の目にも明らかでした。しかし国民感情は以前とは異なりました。今回ほど注目を集めた選挙戦は、エリツィンを選出した大統領選以来なかったのではないのでしょうか。投票日のかなり前からモスクワやサンクト・ペテルブルクや他の大都市で数多くのデモ集会が開かれました。集会の参加者たちは現在の生活を変えたい、自国の発展に尽くしたいと強く望んだ人たちでした。彼らは、政府の上層部がプーチン・メドベージェフの双頭体制の維持を企んでいると考え、公正な選挙を求めて立ち上がったのです。大統領と首相が秘密裡に「ポストの交換」を合意していたことに我慢ならなかったのです。

マスメディアの反・抗議集会キャンペーンが始まりました。デモ集会の参加者たちはどこかのごろつきか、ロシアに再度革命を起こして国家の攪乱をもくろむ輩にすぎないと吹聴したのです。

近年で初めて、新顔の大統領候補者が現われました。大富豪の若い実業家です。私たちの国では大金持ちに対するまなざしは冷ややかです。公正なやり方で大金を稼げるとは誰も思っていないからです。しかしこの候補者は多くの票を集め、いくつかの大都市では第二位に躍り出ました。この事実は、国の現状に疲れた国民が、国家元首として有能なビジネスマン—自らの事業に成功し、効率的な経済を国家規模で展開してくれると期待されるエネルギーで若い有能なビジネスマンを求めたことを物語っているのではないのでしょうか。

政府が公正な選挙を宣言したにもかかわらず、複数の選挙区で多くの違反行為が確認されました。ふたたび抗議デモが行われました。しかし今回も政府は、国家を混乱させるための集会にすぎないと非難したのです。

先ごろテレビで抗議活動に反対する主旨のドキュメンタリー番組が放映されました。しかしここでも多くの視聴者がデータの捏造や歪曲に気がきました。翌日モスクワのテレビ局の前には、国民の利益に対する裏切り行為を糾弾する人たちが集まりました。今後も政府が言語道断の振る舞いをするたびに、人々は抗議活動を行ない続けるでしょう。これは、もう不正を我慢するのはごめんだという国民の気持ち、変化を渴望する新たな国民感情の現れではないのでしょうか。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

振替用紙のメッセージから



- ◎線量計貸与活動へ寄付します。
- ◎クリスマス献金させて頂きます。
- ◎少ないですが、本を処分したためのお金です。いつも祈ってます。
- ◎少しでもお役に立てれば幸いです。
- ◎JCFの重要性は世界的にずっと増えました。
- ◎いつもありがとうございます。お金の支援しかできず、もどかしくなる時もあります。活動に活かして頂いていることが伝わってきてありがたく感じています。
- ◎皆様、本当にお疲れさまです。これからもずっと応援し続けます。
- ◎新しい年がどうぞ平和でありますように。皆様どうぞ良いお年を！
- ◎個展で絵画を売って、義援金を集めました。
- ◎フクシマの原発事故以来、心がつぶれる思いです。どうあらわせば良いのか言葉が見つかりません。どうぞ子ども達をこれ以上苦しい状況にならないように助けるため、協力ができることがあれば教えて下さい。
- ◎自分が強く生きないと人にもやさしくできない。つらいけれども私もがんばります。
- ◎いつもありがとうございます。少しでも考え、少しでも行動することをやめないでいたいと思います。
- ◎"Nuclear"核のゴミも始末することもできぬのに"clear"とは。
- ◎皆様の尊い活動に感謝です。ささやかな気持ちばかりですが。
- ◎免疫反応を調べられる因子はないのでしょうか。いろいろな人たちと連携し、免疫力を損なう汚染地からの1日も早い避難をお祈りいたします。
- ◎国債は利払いをしなくてはならず、国の借金が増えるのに、どうして東電の賠償金には利息が付かないのでしょうか。
- ◎私の知人で福島県本宮市に住んでいらっしゃる方が、去年の3月18日に出産しまし

た。冊子を読んで、前以上に気がかり
になってきました。

◎何もできませんので、せめて寄付だ
けでも。福島の子ども達をよろしくお
願ひします。

◎通販生活の特集・インタビュアー神
谷さだ子さんのまつすくな質問は心に
響きます。

◎『げんばつさよなら』チャリティー
缶バッジを作成販売し集めたお金で
す。福島の子どもたちのためにお使い
下さい。

◎グランドゼロを拝読しました。いろ
んな事を知りありがとうございます
た。

◎少なくとも申し訳ないです。今年も皆
様お身体大切にお励みいただきますよ
うに。

◎福島の子ども達のために。応援して
います。

◎少しですが……。できるだけ続けた
と思っています。何もできず心苦しい

です。

◎グランドゼロの『汚染の対処』は特
に参考になりました。東京の娘に読後
いつも送っています。

◎無事に二人目を出産しました。感謝
の気持ちを込めて、そして全ての子ど
も達の健康を祈って。

◎グランドゼロ冬号も良いレポートで
勉強になりました。ありがとうございます
ます。

◎昨春秋に横浜から信州に引越して
来て、当地に東北から避難されている
方々のことを知りました。体験をお聴
きする会に参加して、あらためて息の
長い応援が必要だと思いました。

◎心からの声援と感謝をお送りしま
す。

◎わずかばかりですみませんが、店頭
でのお客様からの善意です。

◎お年玉。お兄ちゃんと出し合いまし
た。みんなのために働いてくれてあり
がとう。

◎今年は雪も多くて大変だと思いま
すが、体調崩さず元気で過ごしてくださ
いね。

◎ほんのわずかですが、支援し続けま
す。

◎今年もよろしく願ひします。

◎少額ですができるだけ続けます。

◎昨年は入院、手術、リハビリと体調
不良の日々で送金がおそくなりました
が、よろしく願ひします。

◎少額ですが、長く支援していきたい
です。

◎3・11を決して忘れません。これか
ら東北を応援していきます。

◎スタッフの皆様、いろいろ大変だと思
います。かげながら応援しています。
良かったら『たんぼぼ』のHP見て下
さい。災害が起きて立ち上げた微弱な
力の集まりでできた物です。よろしく
願ひします。

Здра в ст вуйт е!

がらくた座 チャリティー人形劇鑑賞会



木島千草さんの人形劇を楽しむ子ども達

2月26日(日)庄内地区公民館でがらくた座のチャリティー人形劇が開かれた。

がらくた座の木島千草さんは月に1回福島県の被災地に出向き人形劇を上演し人権や命の尊さを伝えている。この鑑賞会は木島さんと県内に被災地から避難してきた家族を支える会「手をつなぐ3・11信州サポーターズネットワーク」が中心となり、避難してきた方の心を和らげてもらうと計画、開催された。当日はJCFもサポーターとして資料コーナーにてランドゼロを配布し、信大での健診や食品の放射能測定、ガラスバッチ等の福島支援の紹介をした。

また心のケアも必要ではないかとのことで、臨床心理士さんにも声をかけ、相談コーナーを担当していただいた。何気ない会話だけれど心をほぐしてもらえた事でしょう。

他に使わなくなった衣服などを無償提供するコーナー、おもちゃ遊びを通してリハビリをする玩具福祉士によるコーナーもあり、自然に交流できる雰囲気生まれ、個々に避難された方々もつながれる場となった。

人形劇では手話を交えた話と手袋人形が、どんどん子供的心をつかんでいく。親も気持ちがいっしょとなり和やかな空間ができた。

こんにちは！



おもちゃのコーナーも大人気

木島さんを交えて語りあう時間もあり「第1部では人形劇を通じて心を和ませるしかし第2部ではいいにくいことも、自分の言葉でしっかり伝えたい」と……。 「放射能は友達にはうつらないよ」と子供にもわかる言葉で伝えていた。

そして福島に残っている皆さんからの「避難者さんの中には、ふるさとを捨てたと負い目を感じている方もいるけれど、自分達だって出来れば子供だけでも避難させたい。色々な事情で避難できないだけなので、負い目を感じることは何もない。避難先でも色々苦勞があるだろうが、がんばってもらいたい」という（被災地を訪問しているからこそそのメッセージも話され、被災者同士で分裂しないで欲しいと締めくくった）。

またこのイベントで使用した電力は、信大の三輪名誉教授（JCFの放射能測定チームの指導教授）が長野県の住宅の太陽発電によるグリーン電力証書を購入して、寄付して下さったクリーンな電力でまかされた。

このようにいろいろな支援をしてくださる方のお陰で参加者百名、和やかな雰囲気の中開催してよかったと思える場になり支援サポートとしての第一歩がスタートした。

中澤啓子（JCF事務局）

プリピャチ

ニコラウス・ゲイハルター



映画『プリピャチ』
監督・撮影：ニコラウス・ゲイハルター
1999年/オーストリア/
100分/モノクロ
配給：アップリンク

Movie
チェルノブイリ原発から約4キロに位置する街、プリピャチ。1986年の原発事故から12年後、原発や関連施設で働く人びとや許可を得て帰還した人びとなど、プリピャチの立ち入り禁止区域「ゾーン」で生きる人びとをモノクロの映像でとらえたドキュメンタリー。

イエロー・ケーキ

ヨアヒム・チルナー



映画『イエロー・ケーキ
クリーンなエネルギーという嘘』
監督：ヨアヒム・チルナー
2010年/ドイツ/108分
配給：パンドラ

Movie
旧東ドイツ、オーストラリア、カナダ、アフリカ・ナミビアなど、世界各地のウラン鉱石採掘場を取材し、採掘時に大量に発生する放射性廃棄物や作業員の被ばくの恐れなど、核燃料サイクルの（川上）であるウラン採掘の裏に隠された真実を明らかにした作品。

100,000年後の安全

マイケル・マドセン



映画『100,000年後の安全』
監督：マイケル・マドセン
2009年/デンマーク、フィンランド、スウェーデン、イタリア/79分
発売：アップリンク
定価：3990円（税込）

DVD
核燃料サイクルの（川下）である高レベル放射性廃棄物処分をめぐるドキュメンタリー。フィンランド・オウルキルトで建設されている世界初の高レベル放射性廃棄物の永久地層処分場を取材し、関係者へのインタビューや監督自身によるナレーションで、未来の人類に語りかける。

チェルノブイリ 家族の帰る場所

フランシスコ・サンチェス
ナターシャ・ブストス



『チェルノブイリ 家族の帰る場所』

文：フランシスコ・サンチェス

画：ナターシャ・ブストス

訳：菅 啓次郎

発行：朝日出版社

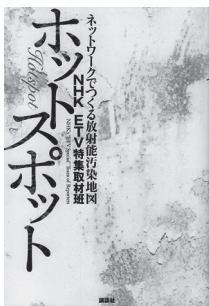
定価：1100 円＋税

Book

チェルノブイリ原発事故により、自分たちの土地や家を去らねばならなかった、ある一家の三世代にわたる人びとの物語。いまは「ゾーン」と呼ばれ立ち入り禁止区域になっている、かれらが住み慣れた土地や家に帰れる日は来るのだろうか。スペイン人作者によるグラフィック・ノベル。

ホットスポット

NHK ETV 特集取材班



『ホットスポット

ネットワークでつくる放射能汚染地図』

著者：NHK ETV 特集取材班

発行：講談社

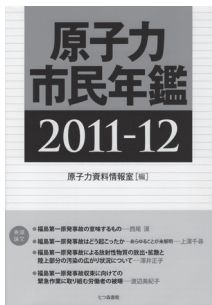
定価：1600 円＋税

Book

2011年5月に放送され大きな反響を呼び、その後シリーズ化された、ETV特集『ネットワークでつくる放射能汚染地図』の取材班による制作ドキュメンタリー。様々な困難に直面しながらも、様々なネットワークに支えられて制作され放送までこぎ着けたプロセスを描く。

原子力市民年鑑 2011-12

原子力資料情報室



『原子力市民年鑑 2011-12』

著者：原子力資料情報室

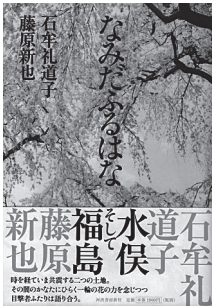
発行：七つ森書館

定価：4500 円＋税

Book

市民団体「原子力資料情報室」の年報「データブック最新刊。巻頭論文は、福島第一原発事故関連の論文を主に2010～11年の原子力事情の動向を掲載。データブックでは、第1部に各原発サイトごとのデータを掲載、第2部ではテーマ別に原発を取り巻く状況を報告している。

なみだふるはな
石牟礼道子・藤原新也



『なみだふるはな』
著者：石牟礼道子・藤原新也
発行：河出書房新社
定価：1900 円＋税

1950年代の水俣、そして2011年の福島。企業と国家によって危機に陥れられた、この二つの土地が60年を経て、いま共震している。歴史は繰り返す。その二つの歴史を、ミナマタの証言者・石牟礼道子と、フクシマの目撃者・藤原新也が語り合う。

Book

日本原発小説集
井上光晴、野坂昭如 ほか



『日本原発小説集』
著者：井上光晴、清水義範、豊田有恒、野坂昭如、平石貴樹
編者：柿谷浩一
発行：水声社
定価：1800 円＋税

井上光晴『西海原子力発電所』、豊田有恒『隣りの風車』、野坂昭如『乱離骨灰鬼胎草』など、純文学からSFまで、推進・反対の立場を超えた五篇の「原発小説」を収録した日本初の原発文学アンソロジー。巻末に文芸評論家・川村湊による解説「原発文学論序説」も収録。

Book

パウル・ツェラン詩文集
パウル・ツェラン



『パウル・ツェラン詩文集』
著者：パウル・ツェラン
編訳者：飯吉光夫
発行：白水社
定価：2400 円＋税

パウル・ツェランは1920年、旧ルーマニア領（現ウクライナ）のチェルノヴィツでユダヤ人の両親のもとに生まれたドイツ語詩人。強制収容所で両親を亡くし、自身も強制労働収容所で肉体労働に従事した。〈3・11〉を受けて編訳者が選んだ代表詩篇と全詩論を収録した改訳決定版。

Book

Chimes of Freedom : The Songs of Bob Dylan

アムネスティ・インターナショナル

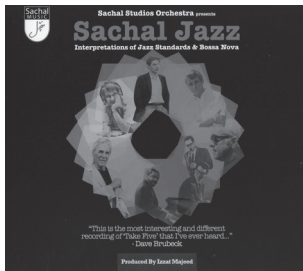


『Chimes of Freedom
: The Songs of Bob Dylan
Honoring 50 Years of
Amnesty International』
発売：アムネスティ
・インターナショナル
(輸入盤・CD4 枚組)

CD
本作は国際的人権団体「アムネスティ」の創立50周年を記念して制作された、ボブ・ディランのカヴァー曲を集めたトリビュートアルバム。ロック、ジャズ、フォーク、ブルース、ヒップホップなど、さまざまなジャンルアーティストが参加し演奏している。

サッチャル・ジャズ

サッチャル・ステューディオズ・オーケストラ



『サッチャル・ジャズ』
サッチャル・ステューディオズ・
オーケストラ
発売：EL SUR RECORDS
販売：オフィス・サンビーニヤ
定価：2730 円 (税込)

CD
パキスタンの古典楽器(シタールやタブラーなど) & ストリングス・オーケストラによる、ジャズ(ボサノヴァ名曲カヴァー集、「テイク・ファイヴ」「デザフィナード」「イバネマの娘」などの名曲を、インド古典音楽ならではの解釈と独特のサウンドで聴かせてくれる。

ショスタコーヴィチ：ヴァイオリン協奏曲 第1 & 2 番

庄司紗矢香



『ショスタコーヴィチ
：ヴァイオリン協奏曲 第1 & 2 番』
演奏：庄司紗矢香 (ヴァイオリン)
ドミトリー・リス 指揮
ウラル・フィルハーモニー管弦楽団
発売：MIRARE
(輸入盤・日本語解説付)

CD
パガニーニ国際ヴァイオリン・コンクール(1999年)で史上最年少、日本人として初めて優勝した庄司紗矢香と、ロシア・ウラル地域のエカテリンブルクに本拠を置くウラル・フィルが、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲を、エモーショナルな演奏で熱演している。

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は1991年1月に設立されました。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCFは、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして2004年、活動の支援先はイラクへも広がられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

2011年3月11日の東日本大震災、そして福島第一原発の事故により、東北地方のみならず広大な範囲で放射線災禍を受けました。JCFは事故直後から緊急医療支援、外部被曝線量測定、子ども達の診察プロジェクトを行ってきました。今後も子どもの検診や環境線量測定、食品汚染測定など、子ども達を被曝から守るための活動を続けます。



◆ JCF 会費振込口座

正会員年会費（1口）	10,000円
賛助会員年会費（1口）	3,000円
郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ JCF / イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	00520-0-81078
加入者名	JCF / イラク支援



第 91 号

発行日 2012年3月26日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 榎野ひかり

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

横内香苗

中澤啓子

協力 寺島仁美

J I M—N E T

加藤丈典

風樹 光

印刷 電算印刷

■編集後記

古代ギリシャでは「希望」は愛欲や傲慢と並ぶ悪しき情動とされていたという。人は希望がある為に不確定な未来を描き墮落する。この説を採るとギリシャ神話「パンドラの箱」はファンタジーから救いのない悲劇に変わる。プロメテウスが天界から火を盗んで人類に与えた事に怒ったゼウスは、人類に災いをもたらすために「女性」パンドラを造る。そして彼女に決して開けてはいけない箱を持たせ人間界に遣わす。ある日好奇心に負けたパンドラが箱を開くと、疫病、欠乏、犯罪など様々な災いが飛び出し、あわてて箱を閉めた時、希望だけが残った……。神々から幾多のものを盗んだ私たちの手に残った希望。たとえそれが「悪徳」であっても、その希望をどんな未来に繋ぐかは、神の手ではなく人の意志にあると、思いたい。(布山)

販売物紹介

Book

- ・「チェルノブイリからの伝言」
J C F 編 (オフィスエム) 1200 円

CD

- ・「小室等／ベラルーシの少女」
(8cm シングル盤) 1000 円

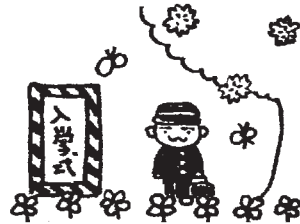
◆がんばらないレーベルCD

- ・「ヴラダン・コチ／ふるさと」
2500 円
- ・「坂田明／ひまわり」
2500 円
- ・「坂田明／おむすび」
2500 円

ドクターかまちゃんの寒天ゼリー

1000 円

* 販売物の詳細は事務局にお問い合わせ下さい。



●特定非営利活動法人

日本チェルノブイリ連帯基金 (J C F)

〒 390-0303

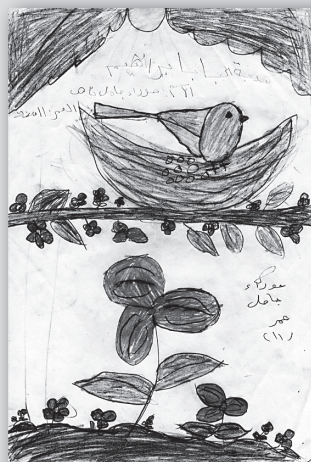
長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail asama@jcf.ne.jp

Website http://jcf.ne.jp





卵を温めている母鳥

ハウラ・ジャマルちゃん

15歳イラク、サマーワ

今年のチョコ募金は

ハウラの絵が好評で無事に終了。

同じハウラが以前描いてくれた絵。

卵を温めている母鳥。

福島県の鳥、キビタキに良く似ている。

放射能から必死で子ども達を守るうとして

福島のお母さん達と通じるものを感じる。

白血病のハウラは治療を終え

現在は検査のみになった。